

503
261

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10¹⁹ 1 2 3 4 5

始





503-261



矢
崎
美
盛
著

現
代
哲
學
思
潮

改
造
社
版

大正
12.6.30
内交

序

哲學の生起と進化とが、外面的歴史の特有形態を取れるものが、即ち哲學の歴史として表象される。斯くの如き形態にあつては、理念の進化の段階は、殆んど偶然的繼起の形式であつて、それぞれ、異別なる原理の實現であるやうに思はれよう。けれども、この幾千年の作業、この壯大なる伽藍建築の棟梁は、唯一の活ける精神であつて、これら異別なる實現は、その思惟本性がディアレクチックの騰揚を果す過程である。即ち、その思惟本性は、自己の何たるかを意識し、かくてそれが對象となると同時に、既にそれ以上に騰揚し、以て己れ自らの裡に、更により高き段階に在るのである。様々に現れる幾多の哲學は、異別なる發達段階にある唯一の哲學であり、各々の體系の基礎たるそれぞれの原理は、唯一同一なる全

體の枝梢である。——これは、ヘーゲルの叡智の言葉である。現代の哲學の動搖は、『哲學』そのものが、自己の全一態トータルテイトを確保せんがための向上である。成熟のために思ひ亂れる若き男性のあへぎである。

茲に現代の哲學の容貌を、統一的組織的に看取することは、いま吾々の關心の懸る處であると同時に、けれど非常に廣汎なる勞作の要求せらるべきものである。この意味に於て、『Kultur der Gegenwart. Teil I. Systematische Philosophie (1921)』中に輯録されてゐる、Traugott Konstantin Oesterreich の論文 Die Philosophischen Strömungen der Gegenwart (一九二〇年春稿)は、私の興味を惹いた。勿論フォルレンドンダーや、ファルケンベルヒや、ユーベルウエヒの哲學史——更に、西田博士の『現代に於ける理想主義の哲學』桑木博士の『現代哲學思潮十講』其他——現代の諸思潮のオリエンテーションを示して呉れるものは尠くない。(ユーベルウエヒ哲學史の現代の部は、エステルライヒが書いてゐる)。併しながら、歴史的關

係と言ふ寧しろ煩雜なる視點からでなしに、各哲學の保持する理念の内部から、直接に各々の位置の設定を試みたエステルライヒの論文は、専門外の人々にもより簡明に、現代哲學の風貌を一と纏めに見せて呉れるであらう。但し、彼れの見方が、彼自身の哲學説上の立場——彼自ら言ふやうに批判的實在論——によつて觸れられてゐると、各學説の組織的のオリエンテーションに急であつて、學説の深奥に參入することが尠く、自己の意圖に應ずるが如き撰擇に赴いてゐるとの憾みはある。従つて、これを以て純學究的の勞作とする事は出來ないけれども、また現代の風貌を大觀するの資けとはならう。

私は茲に以下この論文を土臺として、前記の諸書並びにグロナウ(Gronau; Die Philosophie der Gegenwart 1919) シムツァート(Die Deutsche Philosophie der Gegenwart in Selbstdarstellungen, hrsgb. von Schmidt I, II,)等の編著を参照しつつ、現代哲學思潮の總括的介绍を試みようと思ふ。時間と紙數との制限のもとに、取扱はるべ

き範囲は頗る廣い。或はむしろ、此の論文に關する、補説的の時としては抄譯的の紹介に終るかも知れない。たゞ現代哲學思潮の輪廓と位置とに關する、概要的の總念を與へ得れば満足である。もとより、専門の研究家に捧ぐべきものではない。

この小篇は、かつて『改造』誌上に掲載したものである。いま、歐洲への旅にいでたつべき日、旬日にせまつて、急遽これを單行本に收めることとなつて、匆忙の間、遺憾ながら、十分の訂正補修の筆を加へることが出来ない。蕪雜なる舊稿を以つて、再び新たに讀者にまみえることを、深く陳謝しなければならぬ。原稿の整理と校正とは、一切友人石川曉星君が引き受けて呉れた。厚く同君に感謝する。

大正十二年五月

矢崎美盛

目次

第一章	緒論	三
(一)	現代哲學の範圍	三
(二)	現代哲學の結構	八
(三)	現代哲學の鳥瞰圖	三
第二章	認識論(第一類——古い層)	九
第一節	新カント學派	三
第一項	心理主義	七
第二項	マールブルヒ派	九

第三項 パーデン派(西南獨逸學派)……………三九

第四項 實在論的批判主義乃至批判的實在論……………四五

第五項 獨逸以外の新批判主義……………五〇

第二節 經驗批判主義……………五四

第三節 實用主義……………五九

第四節 歷史科學の認識論(形式的歷史哲學)……………六七

第三章 心理學の瞥見……………七五

第四章 認識論(第二類——新しき層)……………八七

第一節 合理論的思潮……………八七

第一項 現象學並に對象論……………八八

第二項 基礎學としての哲學……………一〇〇

第三項 組織學……………一〇四

第四項 其他の論理主義 附數理哲學……………一〇四

第二節 反合理論的思潮。直觀主義……………一〇九

第五章 形而上學的乃至世界觀的思潮……………一二七

第一節 古きより新しきへ……………一二七

第一項 反形而上學的傾向……………一二九

第二項 古い形而上學——一元論、汎神論……………一三三

第二節 新たなる形而上學……………一三三

第一項 生物學的形而上學——新生活論……………一三三

第二項 心理學からの形而上學……………一三七

第三項 精神科學からの形而上學……………一三八

第四項 新しい有神論……………一四〇

第五項 形而上學の奔流……………一四四

現代哲學思潮

目次

第六項	世界觀の綜合——文化哲學と内容的の歴史哲學	一四九
第七項	獨逸以外の形而上學的思潮	一五九
第六章	新トーマス主義	一七一
第七章	結詞	一七九
附錄	人名索引	一

第一章 緒 論

現代哲學の範圍

(一)

茲に現代の哲學と謂ふは、現に吾々の生活しつゝある此の世代にあつて、尙ほ直接に氣息し脈搏ちつゝある總ての哲學を意味する。そして茲には、其の哲學の建設者その人が、現に存在者たるか否かは、問ふ所ではない。唯だ、要は、其の哲學が現代に生きつゝある事、其處に、本來の現實感を具有することである。されば、茲に、截然たる年代的規定を與へる事は、不可能であつて、寧ろ、その思想世界そのものが、今尙ほ直接に、近代的なるものとして、感受せらるるか否か、主要なる重點の懸る所である。例へば、ヘルムホルツとニイチエとの死を隔つるものは、僅かに四年の星霜にすぎない。(一八九六——一九〇〇)。而かも、前者の思想

世界は、既に全く過去の世界と觀ぜらるゝに反して、後者の夫れは、——彼は、實際上一八八八年以來、既に、精神的には死したる人であつたにも拘らず——今尙ほ直接に、現代の哲學である。後者は、生きてゐる。けれど、前者の思想世界を構成する所の要素は、既に現代の論究からは遠のいてゐる。夫れは、歴史的になつたものとして觀られるであらう。「現代」と過去は、一つの流れである。此の間に、截然たる年代的境界線、客觀的時間概念を與へる事は難い。

従つて、現代の哲學として論ぜられるものも、勿論其の場合の判斷主觀への依屬を免れないであらう。且つ、新カント派の驕將エミール・ラスクを初めとして、幾多の主要なる思想家は、今次の大戦に殉じた。生命の脅威は、屢々、哲學的生産の沈滞を招いた。けれども、いまや、時代は生命の眞諦に目醒めんとする。高められたる情熱を懐いて、時代の精神的要求は、炎々として動いて行く。あらゆる方面に於いて、眞理思慕の精神は燃え、世界觀の革命は企てられる。茲に、現代の

哲學の全野を概觀して、其の特色を學示せんとする課題は、愈々困難なるものとならなければならぬ。

此處には、獨逸の、嚴密に言へば、獨逸語による哲學の上に中心を置く。(此の小篇は、もとより歐米哲學の上に限られてゐる)。けれども、勿論、百年の昔、かの獨逸的精神、浪漫的理想主義が、全思想界に光被してゐた當時の様に、今日獨逸哲學が、世界に獨歩的優越の地歩を占めてゐるのではない。獨逸理想主義の落魄以來、諸民族の哲學的展開は、本質に於いて、各々独自の色彩を發揮して、寧ろ相互の接觸なしに、並存的に進んで來た様に見える。けれども、大戦の勃發に先だつ數年——否、前世紀の末期にまで溯つて——文化諸國民間の思想上の相互關係は、著るしく深められ、擴げられて、其處に、一種の思想上の共働が現出した。漸やく問題は共通となり、謂はゞ國際的の問題聯合が現實となつて來る。——例へば、佛蘭西哲學、特にベルグソンの偉大なる國際的影響の事實がある。其の他に於い

ても、獨佛間の精神的接觸面の廣汎なるは、言ふを須ひないであらう。また一方に、獨逸の思想家のうちで、影響の廣いと言ふ意味で言ふならば、恐らくは、ニイチエとオイケンとが擧げられるであらう。(尤も、單に廣まつたと言ふ意味では、ヘツケルの述作は、恐らく他に比肩するものがないであらう。けれども夫れ等は、嚴密に哲學的の文獻と見做す事は出來ない)。又、ウィンデルバントやコーヘンの思想の力は、遠く露西亞にまでも及んで、其處に多くの新カント學徒を培つてゐる。伊太利、英吉利、其の他歐洲諸國は言ふを俟たない。

尙ほ茲に、哲學史上注目に値する事實は、亞米利加大陸が現代に於いて甫めて、深い哲學的勞作の成遂を致して、其の力を歐洲にまで擴張し得たる事實である。嚴密なる意味に於いて、米國の歴史は現代に初まる。山來、生活の殆ど總てが、ただに經濟的關心によつてのみ支配されてゐた亞米利加大陸に、特に合衆國に於いては、最近三四十年の學的文化の向上は著るしく、今日にありては、學に於いて、

彼は單に受納者たるに止まらずして、實に、既に施與者たるの位置に立つてゐる。米國は今や、自己の哲學を有つてゐる。假令、其の哲學は、論理的の洗練に於いて未だしく、眞の學的追究に於いて、淺いと言ふ事は否み難いまでも、彼は自己に固有なる思想の背景と、従つて固有なるその成果とを産み出してゐる。吾々は、例へばウィリアムズ、ジエームスに於いて、不十分なる思想と並んで、多分に價值ある新思想の提出を、看過する事は出來ない。彼れの哲學は、實用主義——いかにも米國的な考へ方——は、獨逸の學界への潜入は比較的尠いとしても、佛蘭西、伊太利、殊に英國への影響は、最も顯著なるものと謂はなければならぬ。

斯くして、現代の哲學は、國際的に展開しつゝある。戦後の世界は、更に、此の共同勞作へと慕ひ寄る。而して、哲學展開の過程は、總ての文化民族に於いて、其の速度は同一ではないとしても、其の傾向に於いては、殆ど同一方向を指すものと謂ひ得るであらう。生命の問題は、全人類の共有である。思想の流れは、政治

的國境によつて阻まれはしない。

(二) 現代哲學の結構

偕て、上述の意味に於いて、現代の哲學として理解せらる可きものゝ結構は、謂はゞ多様な階層からの組み合せである。最近十數年間の哲學展開史の章節毎に、異別なる原理、異別なる解釋が、様々に現はれて居る。されど、思惟の展開は、保存的騰揚である。凡そ、哲學の發達に於いては、一般に、簡單に一つの思潮が、他の思潮に全く交替するものではない。寧しろ、新思潮の動きつゝある傍には、これと並んで、舊來の思想形式が、尙ほ長い間息づいてゐる。時代の根本的傾向と目さる可きものゝ並存すらも、時としては現實である。斯かる運命は、勿論、必ずしも哲學のみの荷ふ所ではない。寧しろ總ての學が、此の種の歩みに於いて、向上の一路を辿るものであらう。せいぜい例外と見える數學すらも、猶ほ一切の

學の見解の差別相を排除する事は出來ない。抑々、斯かる事實の存するのは、極言するならば、恒に必ずしも、絶對的確實性を以つてするを得ざる、人間智性の缺陷に因るとも謂へやう。——けれども、他面より觀れば、また、斯かる組織的思潮の分派が、限りなく無數であるといふ事はない。此の事實を経験的に考へるならば、夫れは、一面には、無數の問題に對しても、たゞいくつかの答のみが可能であり、また、他面には、人生そのものに於いて、或る種の考へ方が、恒に繰り返されると言ふ理由に因ると謂へやう。されど、一層の理解と洞察とを以つて、是を見るならば、哲學の展開は、單なる反覆にあらで、分合進化の道程にあることを見出すであらう。哲學的反省は、よりよく生れんがために、自己を否定するフェニックスである。自己完成の爲めの自己の反立が、思惟に必然であるが如く、哲學體系の多様は、保存的騰揚に於いて繰り返されるであらう。而かも、それは單なる反覆ではなくて、其處には必ず止揚、而して、増大がある事を看過してはならない。や

がて、來る可き組織に向つての分裂である事を忘れてはならない。

斯くて、此の二十年來の哲學の狀勢は、これを一目にして展望するに難い。人は、時代の特質的の面目として、“Anarchie der Philosophischen Systeme”(哲學體系の無政府狀態)と謂ふ。就中、現代哲學の特徴は、包括的なる體系の缺如と言ふ事であると言はれる。リッケルトも言つてゐる様に、哲學の體系は既に畢つたと言ふ意見が、屢々唱へられる。ニイチエは、余は一切の體系を信じない、體系を欲する者は正直の念を缺く者だと言ふ。藝術的に、宗教的に、將た學的にさへも、反體系的思潮は時代の特色であつた。最近に於いて、此の間に立つて、哲學的體系の討究に向つて、比較的廣汎なる企畫を敢てしたのは、エドゥアルド・フォン・ハルトマンとヴントとを數へ得るのみであらう。けれども、前者の世界觀の屬する所は、寧しろ、前世紀中葉の自然主義的思想世界であつて、彼は既に、過去への閻際に立つてゐる。彼は、寧しろ、新しい形而上學の先驅者である。斯くて、ヴントの

みが現代の體系家であつたとは云へ、けれども、なほ彼は、時代に司配的影響を與へる事は出来なかつた。力強い足跡を留めたニイチエの思想は、包括的の性質を有つてはゐる。けれども、多くの點に於いて、其處には、學たる可きの基礎が足りないし、また眞の體系を創るがためには、餘りに跳躍的である。

斯様に、體系的全體の討究の缺如と言ふ事は、一面に於いては、個別學の異常なる發達に伴つて、全體的综合が困難にされたにも因るであらうが、更に一層此の事情を制約するものは、哲學の全體任務に對して、再び體系的討究を敢てして、是れを自らの中に生かすがためには、前代の哲學的の力が足りなかつたのであると考へられる。けれども、漸やく、新しい若々しい哲學的の要求は、倍舊の活氣において喚起された。今や、青年は反つて、老年者に働きかけようとする。嘗ての浪漫的理想主義の大建築の礎石となつた、光輝ある精神偉力の確信は、再び現代に惠まれようとする。嘗ては渾沌と見えてゐた臆見の海原に、著るしい秩序は

將來せられんとする。コーヘンは、寧しろ新しい形而上學の建設をさへも示唆する。リッケルトは、開放體系に於いて、世界の綜合を企圖する。——哲學今日の狀勢は、寧しろ、一つの力強い統一によつて特性附けられようとしてゐる。夫れも、一つ一つの傾向に於いてではなくて、總體的傾向に於いてである。嘗ては、今日司配的の優越を示してゐる、最新の眞摯なる思潮に對して本能的に嫌惡を洩してゐたものさへも、今や彼等の側からして、是等の新思潮に同化せんと努むるに到つたのは、特に此の統一的傾向を物語るものでなければならぬ。現代は、あらゆる方面に於いて、寧しろ、指す可き港を自覺したる、苦闘の航海であると、謂ひ得ないであらうか。

次の考察に於いては、現代の哲學中の古い層、舊い型に屬するものから始めて、最近の轉向に及ぼう。尠い餘地に於いて、各學說の内部に深く穿入する事は出來ないし、また極めて主要なる思潮にだけ限る事が必要である。且つ、哲學本來

の領土から、多少背後に、乃至應用的に考へられるもの、例へば、倫理學、法律哲學、社會哲學、美學等に關しては、此處には割愛せざるを得なかつた。心理學等に關しても、唯だ直接哲學に關係する限りに於いてのみ、尠き顧慮の拂はるゝに過ぎないであらう。

(三) 現代哲學の鳥瞰圖

エステルライヒは、現代の哲學を、先づ比較的古い層に屬するものと、現代に於いて全く新たななる思潮とに分けてゐる。例へば、新カント學派の如きは前者であり、現象學派の如きは後者に屬してゐる。此處に、現代哲學界の鳥瞰的構圖を得んがために、豫め以下の論述のプログラムを左に示しておかう。大部分に於いてエステルライヒの順序に従ふものである。

認識論(第一類——古い層)

A 新カント學派

- n カントに對して心理的解釋をとるもの……………ネルソン等
 - b マールブルヒ派……………コーヘン、ナトルプ等
 - c バイデン派……………ウインデルバント、リツケルト等
 - d 實在論的批判主義乃至批判的實在論……………リール、キュルベ等
 - e 獨逸以外の新批判主義……………ルヌヴィエ、グリオン、カントニ等
 - B 經驗批判主義……………マッハ、ツイーヘン等
 - C 實用主義……………ファイヒンガー、ジエームス等
 - D 歴史科學の認識論(形式的歴史哲學)……………ディルタイ、リツケルト、ジムメル等
- (附心理學……………實驗心理學、記述的心理學一般)

認識論(第二類——新しい層)

A 合理論的思潮

- a 現象學……………フッサル等
 - b 對象論……………マイノング等
 - c 基礎學としての哲學……………レームケ等
 - d 組オルドゥンク織スレー學……………ドリーシュ等
 - e 其の他の論理主義……………ラッセル等
 - f (數理哲學)……………ラッセル、クローチユラー等
- B 反合理論的思潮(直觀主義)……………ディルタイ、ベルグソン、ジエームス等
- 形而上學的乃至世界觀的思潮
- A 古き層と形而上學との關係
- a 反形而上學的傾向……………(リール、ディルタイ等)
 - b 古い形而上學——一元論、汎神論……………ヘッケル、パウルゼン、フワイエ、ブラッドレー等

B 新たなる形而上學

新トーマス主義……………ガイゼル等

- a 生物學的形而上學、新生活論……………ラインゲ、ドリーシユ等
- b 心理學からの形而上學……………アッハ等
- c 精神科學からの形而上學……………オイケン、トレルチ等
- d 新しい有神論……………キュルベ、フォルケルト等
- e 古い層の認識論への形而上學の反動……………
- f 世界觀の綜合(文化哲學と内容的の歴史哲學)……………
- g 其他獨逸以外の形而上學的思潮……………

以下、このプランと順序に従つて、思潮の大要を見てゆくのであるが、時として精粗宜しきを得ない場合もあるであらう。もとより、以下の論述だけで、現代の哲學に通じ得たりとなすが如きは、暴舉も甚だしいものであることを繰り返しておく。茲には、かゝる廣汎なる領域に關して、能ふ限り簡短なるスケッチ以上に出づる事はもとより不可能であり、かつ實に能ふ限り簡短なるスケッチを示すことが、この小篇の本來の目的である。

第二章 認識論(其の一)

十九世紀の七十年代には特に獨逸に於いて、一方に哲學の存在權利に對する、懷疑の風潮が助成されてゐたのに對して、他方に哲學自身は、己が本來の課題を提げて、其存立を權利附けようと欲し、斯くして徐ろに、若い頭腦の間には、あらゆる精神的勞作に缺く可からざるものとしての、哲學の特質的價値の意識が、再び力強く覺醒されて來た。吾々が、茲に舊い層の思想と呼ぶものは此の時代に生れて今日に及んでゐる。彼等が固有の課題は、認識理論の研究である。實在の總ての部分が、個別學の研究に依つて分擔し、盡されるところとしても、尙ほ其處には、學そのものの研究、其の理論的の意義、限界並びに態度の研究が残されてゐる。此の方途こそは、哲學が先づ自己の存在權利を再び確保すべく、努力し開拓した所

の光榮ある領土であつた。そして、爾來今日に到る迄、認識論上の研究生産は、猶ほ恒に哲學の大部分を占めてゐる。哲學は愈々、學の學たらんとするのである。けれども實際上今日、此の認識論的研究の領土が、總ての個別學の根柢に、直接關與してゐると謂ふのではない。多くの場合に、それは、物理學並びに數學の根本概念の上に限られてゐる。その他の有機的實在の學に關しては、目的論的視點の使用が問題とせられる限りに於いてのみ、認識理論の關與が要求されるやうである。近來著るしく、此の認識論的討究の對象となつて來たものは、歴史學である。また稀れには、化學的概念の認識理論的研究がある。けれども他の自然科學、例へば礦物學、氣象學、地理學、地質學の如きは、未だ殆んど論ぜられてゐない。心理學、言語學、法律學すらも同様である。(唯だ、ヴントの論理學は、其の妥當の領域を著しく擴張して、尠くとも上述諸學の或る部分が包攝されることを要求する)。だからして、此の意味に於いて視るならば、實際上主要なる諸學の全體

を包括する所の、普遍的なる、學の學、即ち認識理論たる可きものに於いては、今日尙ほ缺ける所が多いと言へるかも知れない。その上、大概の認識理論家は、彼等自身の學的關心、並びに其の理解に應じて、最初から、自然科學的にか乃至は精神科學的にかの方向を取つてゐる。其の爲に、認識一般に關する全的理解に達し難い事情が存するかも知れない。けれども、最近の認識論的研究は、斯かる非難を征服せんとする。即ち、それは、原理的に個別學一般、乃至世界一般の成立を論ずる限りに於いて、——原理的に、對象一般、認識作用一般を論ずる限りに於いて——諸學の權能と位置とを、組織的に規定する事が出來なければならぬ。此處にこそ、學としての哲學の使命が存する筈である。

偕て、十九世紀の末葉に對立してゐた二つの認識論上の主潮、即ち、新カント主義 (NeuKantianismus) と、經驗批判主義 (Empirio Kritikismus) とは、いまもなほ存続する。これと同時に、この兩者からは、現世紀に到つて、更に新しい思潮が生ひ立つ

て來た。即ち新カント主義から新たに生れ出でたものは、批判的實在論(Kritischer Realismus)であつて、これは、なほ勿論カントの餘韻を認めさせはするが、併しながら、舊來の新カント主義の獨斷的傾向を脱却せんと欲してゐる。經驗批判主義は一面に於いては、批判的實在論に近づいて來たが、また他面には、新たに實用主義(Pragmatismus)的の潮流を産み出した。實用主義は、經驗批判主義の懐にあつて、永いあひだ表面下に準備されつゝあつたものである。

以下、順を逐うて、これらの各主潮を瞥見してゆかう。

第一節 新カント學派

—Neukantianismus

現代の認識理論的思惟の中で、最も偉大なる思潮は、新カント學派である。現世紀初頭の蔚鬱たる哲學的要求の覺醒を率ゐ、現代哲學の中堅となつた功績は、つとに、此の學派の擅に委せらる可き所である。されど、また近來、其の理論の普遍的妥當の要求は、例へば現象學の主張者の如きに依つて、多分に動搖に置かれてゐる事も事實である。蓋し、新カント學派もまた、自然主義的時代の出産である。従つて、此の學派は、極言するならば、十分なる思惟の自由を疑はせるほどに、嚴密科學の根本概念と關係づけられてゐる。即ち、彼等は、大體に於いて、嚴密科學、數學、物理學から出發する。而して、彼等は、カント其の人が爲した様に、この物理學の成立如何をば問はず、ただこれを一の事實として受け取る。新カント學

派は、カントを以つて哲學の完成者と見ないまでも哲學展開の新方向を規定する者と見て、彼に依つて示唆された所への完成の路を進まうとする。

けれども、この新カント學派そのものも、個々の方面に於いては、また更に幾つかの分派となつて現れてゐる。而かも、其の諸派は、既に本質的の點に於いて、相互に一致する事が出来ない。例へば、既に、數年の論争にも拘らず、カント自身の見解が何であつたかに就いてさへも、彼等は一致する事が出来なかつた。そして、批判主義は如何なる方向に於いて展開すべきであるかに就いては、今や容易に一致し難いものがあるであらう。百年前のあの浪漫的理想主義の思想が、ただ自らカントの哲學そのものたらんことを期して、而かも尙ほ、カントを超出せんとする哲學的生産力の偉大さを展開してゐたのに比して、近代の新カント主義は、餘りに狭くカントの述作に執着するものではないであらうか。エステルライヒの謂ふ様に、今すこし年代を経て後、より大きい時間的距離を置いて眺め

るならば、現代の新批判主義運動は、十八世紀のライプニッツ・ヴォルフ哲學に比す可き、十九世紀末の史的教養と見えないであらうか。より多分の、天才的創造乃至跳躍の力が欲しましうはないであらうか。けれども、他面に於いては、斯かる事實は、反つて、此の學派の餘りに強き學的良心、餘りに精細なる學的顧慮を證するものであつて、此の方途に於いて克ち得たる彼等の偉業に對して、現代の心は、永遠の桂冠を捧げなければならぬのである。

實在に關して、古い素朴的實在論が考へるが如くに理解する事は出来ないと言ふ確信、従つて、例へば、色彩と音響の世界は、吾々が聞き且つ見るがまゝに、認識主觀から獨立に存在するものでないと云ふ確信は、總ての新カント學派に共通なる所である。けれど、斯様な見解は必ずしも、新カント學派のみの確信ではない。此の見解が、恒にカントの祖述にのみ俟つと言ひ得ないのは明らかである。寧ろ、ヒューム、ロック、デカルト、ガリレイにまで溯つて、この確信の跡を辿る事

が出来やう。唯だカントの天才が異常なる深さを以つて、此の確信を基礎づけた事は明らかである。

新カント學派に共通なる第二の見解は、自然は、吾々の感能的知覺の内容そのものではなくて、全く、思惟の産出であると言ふ確信である。即ち、自然は、始めから存在する絶対者ではない。悟性の先天性の基礎の上に於いて可能となる所の經驗對象の全體である。此の見解に關する體系的組織的の論證によつて、カント學派は、決定的の功績を克ち獲た。(特にマールブルヒ派、バーデン派参照)。更に、カント學派のすべての思潮は、斯かる自然の成立(構成)に際しては、先天的契機が、決定的の役目をつとめると言ふ事を、主張する。然るに、斯かる先天性の本質を把握する點に於いては、異別なる諸派は、互に遠く乖離する。更に一步を進めて、先天性の承認を以つて、獨斷的なりと看る者は、やがて、本來の新カント學派から離れて行かうとする。(即ち批判的實在論が生れる)。

第一項 心理主義

— Psychologische Deutung Kants

由來、カントに就いては、心理學的の解釋が存在した。勿論、感官による世界形象の規定を説くヘルムホルツ Hermann von Helmholtz (一八二一—一八九五) 流の、舊い考へ方は、現代に於いては殆んど見當らない。けれども、先天性の生得説は、いまなほ片影を留めてゐる。吾々の心に、或る生得の機能が具備されてゐて、世界形象の構成には、必ずこの機能の參與があり、従つて、また逆に、吾々の世界理解から、かゝる生得的機能の關與を切り離すことは出来ないと言ふ考へ方である。例へば、ジューメル(後段参照)の如きも、より多く純粹論理的の考へ方を保持してゐるとは、雖も、なほ意識的に、此の考へ方に屢々表現を與へてゐることは、拒むを得ない。彼れは、此の心理學的解釋を、殊に精神科學の認識理論に使用してゐる。

けれども此の方面に於いて一層顯著なるものとしては、尙ほフリース Jacob Friedrich Fries(一七七三——一八四三)流の心理主義に依倚して、カントの純粹心理學的解釋を採る者に、ヘッセンベルグ Gerhart Husenb.ry(一八七四生)、カイザーク K. Kaiser、ネルソン Leonard Nelson(一八八二生)等がある。(フリース學派)。彼等に於ける先天性の承認は、心理學的である。先天性は、心理學的分析、內的省察、一種の內的實驗によつて見出されなければならない所の事實である。構成的、先天的命題は、自己省察(內的經驗)によつて意識に齎さるべきであると説かれる。けれども、此の場合に意味せられる所は、或る命題に於ける自明的判断と云ふ事か——若しくは、吾人の思惟は對象たる自然の構成に當つては、既定の原理に基づくものであると言ふ、單なる事實的證明かにすぎない。第一の場合、例へば因果律の如きが、矛盾律の様に自明的の命題であると言ふ考へ方は、既にカントによつて排除されてゐる。第二の場合には、ただ一人一人の事實的處置を確定する

にすぎないであらう。其處には、先天性本來の面目たる可き、その權利問題は確保されてゐない。斯くて、其の他の新カント學派は、原理上、先天性の心理的理解(心理主義)を捨て、論理的解釋(論理主義)を以つて、カントに對する唯一正當なる理解であると考へる。

第二項 マールブルヒ派

——Marburger Schule

此の論理主義的方向の徹底的成遂は、まづ、マールブルヒ學派の建設者ヘルマン・コーヘン Hermann Cohen(一八四二——一九一八)に於いて見出される。現存の人々の中で、彼の考へ方の最も主要なる代表者は、彼れの弟子たるパウル・ナトルプ Paul Natorp(一八五四生)と、エルンスト・カッシーラー Ernst Cassirer(一八七四生)とである。その他に、此の學派に數へらるべき人々、猶しくは夫れに近き人々には、ルドルフ・シュタムラー Rudolf Stammler(一八五六生)、フランツ・シュタウディ

ンガー Franz Staudinger (一八四九生) カルル・フォルレンダー Karl Vorländer (一八六〇生) アウグスト・シュタッドラー August Stadler (一八五〇——一九一〇) クルド・ラスウイツツ Kurd Lasswitz (一八四八——一九一〇) 更にゲールランド Albert Görland (一八六九生) リーベルト A. Liebert キンケル Walther Kinkel (一八七一生) ケラーマン Benzon Kellermann ニコライ・ハルトマン Nikolai Hartmann (一八八二生) ブッヘナウ A. Buchenau ブエク O. Buek ファルター G. Falter ガヴロンスキイ D. Gawronski ハイムゼット Heinz Heimsoeth (一八八六生) ノックマン Wih. Köppelmann (一八六〇生) ケーニッツ Edm. König (一八五八生) 等がある。マールブルヒ学派は大體に於いて、心理的の認識作用に執着することなく、理論的物理学に見る様な、客観的の厳密科学から出發して、純粹論理的に處置しようとするものである。

コーヘンは、純粹認識の論理学と、純粹意志の倫理学と、純粹感情の美学とによ

つて、人間意識乃至文化に關する方法的理想主義の體系を構成する。眞の實在は、純粹思维の生産に外ならない。従つて、思维は、其の根原を、何らかの所與に、即ち自己以外の何物かに於いて有つ事は出來ない。哲學は、されば、直観を以つて初む可きにあらず、純粹思维、即ち先驗的論理学を以つて出發すべきである。蓋し其の論理学の思维は、自己生産的なる學の思维である。論理学は、根原の論理学であつて、此の根原は、すべての純粹認識の演繹の根元である。而して、思维の、従つて實在の根本形式は、概念に非ずして判断である。判断は、範疇となつて具現する。これは、純粹認識若しくは對象の法則(即ち實在の諸形式)に應ずるものであつて、此の純粹認識の種類乃至方向から演繹される。斯くて、コーヘンは次の如く判断を分類する。

- 一、 思维法則の判断 イ根原 ロ同一 ハ矛盾 の各判断
- 二、 數學の判断 イ實在 ロ多 ハ全 の各判断

三、數學的自然科學の判斷　イ實體　ロ法則　ハ概念　の各判斷

四、方法の判斷　イ可能性　ロ現實性　ハ必然性　の各判斷

斯くの如き方法的據礎の上に立つて、彼れの哲學は、異常の論理的精密さを以て展開する。以上から看取し得る様に、彼れの哲學に於ては、數學の、若くは數學的自然科學の論理學たるの風貌が顯かである。マールブルヒ學派が、一般に、嚴密に「學」として理解するものは、根柢に於いて、たゞ嚴密自然科學即ち物理學のみである。爾餘の諸科學はカントに於いての様に、また此の學派に於いても、認識理論の遂究の爲には、重要な考察を要求し得ない。夫れらは、物理學の理想的完成に際しては、寧しろ其獨立を失ふであらう所の不完全認識である。同時に、物理學の論理的構造は、解剖せられ闡明せらるべきである。併し乍ら、其對象たる世界形象が、如何にして把握せられるかと言ふ様な問題は、無意味である。存在は思惟に外ならない。是を以て、感覺經驗の如きは認識論上、原理的に拒排

せらる可きである。實際に、感覺的經驗からは、コーヘンに依つて明瞭に、認識の正しい源泉たるの性格は、除外されてゐる。其の必然の歸結として、實在の概念は、改造されなければならぬ。何物かゞ直接に、知覺的に經驗されると云ふことで、何らかの事實に、實在としての性格が與へられるのではなくて、寧しろ思惟的に、數學的に、夫れが零以上の或る量を學示するといふ事に依つて然るのである。而かも、コーヘンは、實在に數ふるに、常に正數のみではなく、また負數、虚數をも是に數へる。斯くて、實在的の量と、數學的の量との別は、一般に止揚される。

勿論、ナトルプの立場もまた先驗主義である。されど、こゝでは、論理學認識批判は、因果關係に従つて、現象の時間的秩序を規定する自然科學の如くではなしに、全く、認識と其の條件の統一を目指すものである。論理的數學的法則のみが、最高の妥當性を有する。唯だ、認識批判の道程に於いてのみ、即ち、數、時間、場所、量、物、原因等の範疇的根規定の下に従屬させる事によつてのみ、事實の認識的結

合が成立する。極言するならば、斯くてこそ、此の結合の法則性、従つて自然の認識が成立する。此の際、認識は、無限の過程論理的課題として理解されなければならぬ。蓋し、事實の規定は、恒に只、近似値を與へ得るのみである。斯くて、自然科學の任務は、無規定態をば愈々思惟の限界内に包攝してゆく事である。されば、又、對象は、學的認識にとつては、恒に無限の課題として留る。論理學の最後の根柢、其出發點は、コーヘンの所謂「根原」の原理である。同時に、思惟の前進の可能性は、茲に基づいてゐる。論理的思惟の原本作用は、概念的創造である。斯くて嚴密科學の論理的構成が行はれる。先づ數學に於いて、次に數學的物理学に於いて、各種の論理的純粹規定が與へられるのである。カッシーラーに於いても、また、理論哲學は、數學並びに數學的物理学との緊密なる關係に置かれてゐる。併し乍ら、ナトルプに於いては、彼れの一般心理学は、斯かる學の論理的基礎を闡明するものである。夫れは、心理学の對象(問題)と方法とを論ずる限りに於い

て、心理学の哲學である。即ち、ナトルプ(並びにカッシーラー)にあつては、原理的には、先天性の純粹論理的解釋に固執するにも拘らず、既に其の理論には、心理學的要素の潛入を認めざるを得ない。蓋し、彼が常に同時に判斷を包有する所の知覺が思惟規定であると言ふ事を強調するならば、夫れは、心理學的契機を受用に外ならない。總ての現實は、思惟内容であり、斯かるものとして、量質關係の根本範疇に従屬するであらう。勿論、ナトルプに於いても、實在概念は、知覺から離されるけれど、夫れは、稍コーヘンに於けるよりは、異つた仕方にてである。認識意味に於ける事實とは、ナトルプにとつては、完成的に思惟せられたる嚴密なる自然形象の中に、構成要素として包有されてゐるであらう所の、或物にして甫めて然りである。けれど、認識は、永遠の過程である。夫れは無終結である。それ故に、「事實」は認識の目標であるにすぎない。取つて以つて證明し得るが如くに、既に存在する所のものではない。蓋し、自然認識は無終結であり、對象は永久の

課題であるからである。けれども承認せらる可き世界形象は、自然因果的、合法的のものではなければならない。學的處置は、斯かる世界形象を構成する所に存立する。即ち、感覺の材料が或る仕方、知性的に訂正組織されると言ふこと——斯様な補充物を除去する事によつて、結局因果的に完結した合法的の世界形象が成立するといふ事、茲に「學」の處置を見なければならぬ。其の他のものはすべて、前程段階にすぎない。知覺が思惟規定であると言ふナトルプの言ひ方は、此の意味に於いて理解されなければならない。即ち、心理學は、認識の獨立性を有せず、夫れはただ前程段階にすぎない。けれど、斯様に論ずる所に、いはば、彼は論理的の分析から、尠くとも一度びは認識の構成的心理學へと進んだものと言つて宜いであらう。そして其處からこそ、彼れの「心理學の哲學が成立したのである。

カッシーラーに於いても、マイルブルヒ學派は一段の展開を遂げつゝある。彼

もまた、知覺の承認を以つて實在性——客觀性の最後の準矩とする事は出来ない。たゞ自然科学的論理的關係において妥當なるもののみが客觀的である。意識内に直接與へられるものが夫れではない。それ故に、彼は、その成立の確實さに従つて、客觀性の段階をさへも假定しようとする。

斯くて、マイルブルヒ學派の理解に従へば、世界は、純論理的の形成態である。質量、物質、エーテル、力、原子等、總ての自然科学的概念は、決して、感官に依つて十分に知覺される所の、吾々から獨立に自存する所の實在の、思考的再現ではなくて、全く現象の混雜の中に、何らかの秩序を齎すための、——斯くして結局、因果的に完結的の、且つ數學的型式に於いて規定され得る様な、世界形象に到達せんが爲の、構成の手段である。單なる意識内容の知覺的確定は、本來「學」ではない。自然は、純論理的構成態であり、従つて、斯かるものとしては、何處までも思惟的分析に堪へ得るものでなければならない。斯くて、素朴的なる知覺をば、一般に、認識

理論の考察から排除せんとする傾向は、同時に、感能知覺の背後に自存して、知覺の中に現象する所の物自體と云ふが如き、客觀的世界の存立を排斥する。一方には唯だ感覺的現象の混雜があり、他方には、自然の論理的構成態があるのみである。客觀的なるものは、たゞ、後者の(其の理想的完成においての)成分のみである。斯かる世界形象の中に、自己に相應する契機が現れてゐると言ふ事に外ならない。

此の認識論的方法が倫理學の上に齎らされて、批判的の倫理學をば積極的の内容を以つて満した事は、その事は現代の倫理學に屢と缺けてゐる事だが、コーヘン並びにナトルプの功績でなければならぬ。且つ、認識論が存在(實在)の論理的條件を討究する様に、倫理學が當爲の條件を闡明する。即ち、純粹思惟の論理學が、數學の基礎の上に立つ様に、純粹意志の倫理學は、精神科學の數學としての法理哲學の上に立ち、斯くて、倫理學は、法律及び國家哲學の原理論となつて、其

の局、此の學派が、獨逸社會主義の哲學的代表者となり得る事は、特に彼等に歴史的の意義を與へるものでなければならぬ。併し乍ら、此の際社會主義は、唯物論的幸福主義の水準以上に、遙かに高められて、義務の概念や、人格の概念が其の中心に立つてゐる。此の學派から出でて、殊に社會哲學、法律哲學の方面に向ふものにルドルフ・シュタムラーの努力がある事を看過してはならない。

第三項 パーデン派(西南獨逸學派)

——Badische (oder Südwestdeutsche) Schule

或る範圍に於いて、マールブルヒ學派と親近なる論理主義的態度を取るものに、パーデン學派、即ちいはゆる西南獨逸學派がある。現代に於ける、恐らくは、最大なる哲學史家、ウイヘルム・ウインデルバン、アント・Wilhelm Windelband(一八四八——一九一五)に依つて、其の基石を置かれ、現代に於ける歴史哲學の權威、ハインリッヒ・リツケルト Heinrich Rickert(一八六三生)に依つて、愈々展開せられつゝある新

カント學派である。悼むべきエミール・ラスク *Eril Lask* (一八七五——一九一五)も、リッケルトの弟子であつた。ヨナス・コーン *Jonas Cohn* (一八六九生)の眞摯なる歩程も、此の學派と携伴せんとしてゐる。『カントスツヂェン *Kantstudien*』と並んで、哲學雜誌界の權威たる『*ロコス Logos*』誌は、多分に此の學派の傾向を代表するものであつて、クローナー *Richard Krahn* (一八八四生)とメーリス *Georg Nehls* (一八七五生)とが編輯の任に當つてゐる。なほ、こゝには、クンツェ *Friedrich Kuntze* (一八八一生)、レーザー *Herman Leser* (一八七三生)、ブルノー・パウ *Bruno Bauch* (一八七七生)、エドムンド・ケーニッヒ *Edmund König* (一八五八生)等も、此の學流に近きものとして數へ得るであらう。

ウインデルバントもまた、カントの批判哲學の徹底から出發する。されど、彼に於いてはカントを理解することは、カントを超越することである。斯くて、彼もまた、物自體の考へを排棄する。従つて、認識とは、吾々から獨自に存在する所

の實在の捕獲ではない。知識の根柢は、全然、思惟の要求に置かれる。されど、客觀性の解釋に關しては、マールブルヒ學派の理解とは異つてゐる。由來、ウインデルバントに従へば、哲學とは、普遍妥當的價値の批判的學である。即ち、思惟に於ける眞理、意志行爲に於ける善、情に於ける美の價値の體系である。而して、眞理の爲には、先づ規範意識を假定しなければならぬ。此規範意識に立つて、價値の概念に訴へて、思惟の客觀性の準矩が獲られる。正しい思惟とは、規範的なものである。蓋し行爲に關して、絕對的の當爲の規範が存するが如くに、思惟にとつても、又斯様な規範がある。眞理の規範意識を認めずしては、苟くも、知識を論ずる事は不可能である。カントが、規則と呼んだ所の、此の絕對の規範に應ずる所の思惟を、吾人は正しいと言ひ、これに背馳する所のものを、誤れると呼ぶのである。それ故に、例へば、物自體の如き、客觀的實在と、一致すると云ふ所に、眞理性を認めんとする所謂模寫説の

考へ方は問題にならない。斯様な謂はゞ意識の領土を超えた實在を、豫め假定する事は、本末を誤れるものである。知識が實在に合致する事に依つて、眞理となると言ふ前に、先づ、實在のあるといふ事が眞理でなければならぬ。斯くて、普遍妥當的知識なるものは、模寫説の説くが如きに非ずして、普遍的なる規範意識によつて経験内容を構成する事による。存在の前に、價值がある。而して、此の規範の組織を明らかにする事が、認識論の任務であり、その目的は、普遍妥當的の思惟である。されば、彼れの認識論は、フイヒテに於ての様に、知識の根柢に實踐理性的、意志的要素を認むる限りに於いて、目的論的結構を示してゐる。偕て、現實の中には、合規範的思惟と反規範的思惟とが入り亂れてゐる。宛かも、善行と然らざるものと、美と美ならざるものとが混じてゐる様に。此の間に立つて實證科學は、規範の問題に無關心に、ひたすら個々實在の確證に急ぐに反して、哲學は、まさに、あらゆる領域に於いて、先天的規範の探求を志し、價值の認識へと赴

く。哲學は實に價值論である。斯かる純粹價值の形式的學問は、論理學、倫理學、美學となり、其の内容は、歴史的に展開する。

此の思想に追従して、更に一步を進めたるものは、リッケルトである。彼は、個人的主觀的價值判斷より、はるかに高められて、超個人的、絶對的價值を論ずる。彼は先驗的意識を説く。即ち、總ての存在は意識に於ける存在であると言ふ。此處に意識とは、勿論個人的のものではなくて、超個人的、普遍的のものである。意識一般である。先驗的問題の關する所は、個人的意識ではなくて、たゞ此の意識一般である。凡そ、個人的意識の彼岸に、個人的意識を超えて、何らか存在のある事は自明である。けれども、意識一般の彼岸の存在とは、排棄せらる可き考へでなくてはならない。意識一般とは、個人的意識の總和ではない。けれど、それは概念であるのみでなく、また現實である。そして、此の意識一般に對して、意識内容一般があるのである。而して、此の意識内容一般も、判斷意識一般に依つて

肯定せられたる内容である。斯くて判断が認識の基礎である。即ち、認識とは、價値に即しての是認若くは拒絶である。而して、是認せらる可きものは、超個人的、無制約的命令として現れる不許(不當爲)に基く所の要求による。斯くて、倫理的概念たる良心並に義務の概念は、また純粹理論的處置の窮極の根柢となる。斯くして、論理的判断に於いては、其處に是認せられたるものの、超時間妥當の確信が引き入れられるのである。

文化科學と自然科學の別歴史哲學の展開。これらの方面に於ける、リツケルトの勞作は、特に吾々の關心を要求する。後段に於て、多少なりとも、この方面を覗ふの機會があるであらう。

なほ論理態の價值的性格に關しては、ミュンステルベルヒ Hugo Münsterberg (二八六三——一九一六?)も、これを主張した。彼はまた、リインデルバント、リツケルト、メデイクス Fritz Medicus (一八七六生)、オイケン等と共に、新フイヒテ主義

の下に稱ばれ得るであらう。

第四項 實在論的批判主義乃至批判的實在論

—*Realistischer Kritizismus und Kritischer Realismus*

上述新カント主義の二大思潮は、孰れも、物自體の考へを棄て、従つて、眞理てふ概念の全き改造に、到達するものであるが、茲に、此れ等の反實在論的思潮と並んで、同じく、新カント主義の中に數へらる可き者にして、實在論的傾向を採る人がある。彼等は、カント自らが屢々然うであつた様に、物自體の假定を承認し、従つて、尠くとも或る限界内に於いて、客觀體を知性的に把握する事を以つて、認識の眞理であると主張する。此の謂は、實證主義的理解のもとに、感覺論的に認識理論を説く者に、エルンスト・ラーズ Ernst Lenz (一八三七——一八八五)及びアロイス・リール Alois Richl (一八四四生)がある。就中、所謂(學派と云ふ程ではないが)、實在論的批判主義、若しくは、新批判主義的實在論の主要なる代表者は、リール

ルである。彼に従へば哲學は、世界觀學說ではなくて、認識の批判でなければならぬ。此場合認識は、感覺なる根本事實から出發する。經驗の限界を超出するが如き形而上學は非學的である。とは言へ、認識は、簡単に吾人の感覺知覺の成果ではない。其處には、感性的知覺と同様に、また思惟が、重要な認識構成の契機である。素朴的なる感官印象の推蔽を通して、そこに始めて本來の知覺が成立するのである。蓋し知覺は、論理的には、單なる感官印象以上のものを包有するからである。かくて、經驗は、或る先天的の原理——物質恒存とか絶対因果性の原理とかの如き——の規矩に従つて成立する。斯かる原理は、先天的であり、經驗からは獨立なる性格を有するもので、寧ろ、總ての經驗に對して、規制的、構成的の意義を有つてゐる。逆に、經驗は、其の統制の下に従つて、甫めて、思想的に構成されるのであるから、決して、兩者の間に矛盾の存する事は有り得ない。而して、斯かる原理は、嚴密科學の論理的な分析に依つて明らかにされる。偕て、感能

的の感覺が、認識成立の出發點と爲り得るのはそれが、主觀から獨自に存在する處の、客觀的實在の標號である故である。リールは、マールブルヒ學派とは全く反對に、自然の思想的構成も、純思惟的のものではなくて、客觀的實在の思想的再現であると考へる。けれども、物自體の質は、是を直接知覺する事は出来ない。時間客觀的妥當性を有しない限り、心的體驗は、全く現象に限られてゐる。客觀的意義を有するものは、唯だ、吾々の知覺の數學的及び論理的內實のみである。批判的形而上學を取るヨハンネス・フォルケルト J. Jaures Volkelt (一八四八生) もまた、感官印象が、因果性、必然性、普遍性、法則性等の先天的範疇によつて作用される事を強調してゐる。

リールやフォルケルトが、新カント學派に數へられるならば、以下に擧ぐるが如き、實在論的の立場を取る一團の思想家も、又、此處に列す可きであらう。即ち、彼等は、狹義の新カント學派の固執する先天的命題を以つて、大部分、只だ、獨斷的の

假定に過ぎずと考へて、此の先天的要素を強く排除し、斯くする事に依つて、眞に、獨斷論から離絶すると考へる。其の限り於いて、明らかに、狹義の新カント學派からは區別される。就中、彼等は認識に關して、再び、知覺の意義を承認し、而して、通常の實在概念の代りに、(狹義の新カント派の如くに)全く異つた實在概念をば、定立することを斷念する。併し乍ら、學的實在は、知覺の基礎の上に、悟性、に依つて、甫めて、構成されると考へる點に於いて、彼等は、正當に、新カント主義に合す可きものである。彼等は總括して、批判的實在論と呼ばれ得るであらう。

偕て、此の方面の最も廣汎なる成果を、人々は、オスワルト・キユルペ、Oswald Külpe (一八六二——一九一六)に於いて期待してゐた。彼は、實驗的心理學から出發して、學的基礎の上に立つ實在論的形而上學に進む。けれど、彼は、只だ、他學派の認識論、特に、マールブルヒ學派に就いての精細な鋭い批評を發表しただけで終つて了つた。更に計畫されてゐた廣汎なる制作 Die Realisierung. Ein Beitrag

zur Grundlegung der Realwissenschaften (三卷)のうち、わづかに其の第一卷が最近にあらはれてゐる。

批判的實在論を、實證的に基礎づけようとする者に、またエリッヒ・ベツハー(Erich Becher (一八八二生)が居る。彼れの哲學も、眞理といふ視點に立つところの智識學であるが、彼は、寧ろ自然哲學から出でて、^{ワイタスマス}生派論に傾いてゐる。彼は、極めて慎重に考へる。けれど、結局、多くの問題に於いて、窮極の決定が與へられてゐない。例へば、客觀世界は、感官世界と質的の類似を有するか否か、實在は、全くユークリッドの自然であるか否か、實在は、嚴密に法則的であるか否か、等の問題は、結局、答へられざるがまゝに残されてゐる。又、一方に、彼は、實體や因果性の理念を固執し、又空間的、時間的性質に類化する屬性を、物に賦與しようとして考へてゐる。更に、多少とも、批判的實在論の立場に在る人々の中から、次の名前が擧げられるであらう。マイノング Alexius Meinong (一八五三——一九二〇) シュツムプ

Carl Stumpf (一八四八生)、デュル (Ernst Dür) (一八七八——一九一三)、メッサーアー (Gust Messer) (一八六七生)、シュテーターリング (Gustav Wilhelm Störing) (一八六〇生)、フリッシュアイゼンケラー (Max Frischeisen-Köhler) (一八七八生)、エステルライヒ (Traugott Konstantin Oesterreich) (一八八〇生)等。(これらの人々に就いては、後段参照)。この實在論的の思潮は、認識論上本來の新カント學派以外に、かなり注目すべきものであらう。

第五項 獨逸以外の新批判主義

—Neokritizismus

カント哲學を祖述せんとする傾向、廣義の新カント主義は、勿論獨逸にのみ限られた思潮ではない。強い哲學的要求の支配する所には、必ず此種の運動が現れてゐる。

佛蘭西に於いては、特にシャルル・ルヌウヴィエ (Charles Renouvier) (一八一八——

一九〇三)が擧げられる。彼は、カントの先驗主義と、ヒュームの現象主義との結合から出發する。彼は、物自體、實體、現實的無限等を拒斥するけれども、また、自由即ち新たな開始の可能性に、經驗的世界に於いてさへも、一つの場所を與へてゐる。(形而上學の項参照)。ラッシュリエ (Inles Lachelier) (一八三二——一九一八)もカントの源を汲んで、觀念論的の形而上學に赴く。更に、ブートルウ (Ernie Boutroux) (一八四五——一九一八)は、實踐的基礎に立つ自由の形而上學を建てる。また彼によつては偶然性の問題が論ぜられる。けれども佛國に於いては、特に批判的實在論は、科學者たると同時に、認識論者たる二人の代表者を有つてゐる。即ち、物理學者なるデュウアム (Pierre Duhem) (一八六一——一九一六)とポアンカレ (Henri Poincaré) (一八五三——一九一三)とである。彼等もまた、カントの研究を通じて來たのであつて、科學的自然形象の構成に於ける、思惟要素の意義を強く認めてゐる。けれど、彼等は、同時に、物理學的研究に於いて、實際上の經驗を経て

來た物理學者として、感官知覺の意義を排除しはしない。物理學的原理に、先天的性格を認容する所の、獨逸の新カント學派と異つて、ポアンカレは、斯かる見解を棄てて、此の種の原則をば、任意なるものと考へる。夫れ等は、また、他のものに依つて置き換へられるであらう。學的命題はすべて、コンヴェンチオンであり、臆説であると考へる。併し乍ら、事實は、決して、思惟によつて、甫めて創造されるものではない。思惟は、唯だ、直接の知覺經驗の推敲を意味するに過ぎない。

英國に於いては、ケヤード Edward Caird (一八三五——一九〇八の外に、グリーン Thomas Hill Green (一八三六——一八八二) 派の批判的理想主義がある。伊太利に於いては、カントニ Carlo Cantoni (一八四〇——一九〇六) は、三卷よりなるカント哲學の論述を書き、また、批判主義的精神に於いて、Rivista Filosofica を主宰した。トッコ Felice Teso (一八四五——一九一三) は、また、コーヘンに就いて書いてゐる。露西亞に於いては、マールブルヒ學派、更に一層、バーデン學派の影

響が見られる。そこには、トルベッツコイ Sergei Jul. Trubetzkoi (一九〇五死) 並に、ウィーヂェンスキー Alexander Wiedienskij (一八五六——一九一八) の名前を挙げ得るであらう。——其の他、スカンヂナヴィヤ諸國、和蘭、白耳義、西班牙等に於いても、新カント學派の存在を見る事ができる。

第二節 經驗批判主義

— Empirio-kritizismus

十九世紀の末頃から、現代認識理論の第二の大きい思潮が芽生えて來た。即ち、實證論的なる經驗批判主義の思潮である。經驗をば、能ふ限り純粹なるものとし、經驗に纏綿してゐる形而上學的の理念から、經驗を解放しようとする。斯くて、純粹なる經驗こそ實在そのものであると考へる。此の思潮も、また、自然主義的時代の出産でなければならぬ。従つて、其の影響は、本來の哲學の内部に於いてよりも、嚴密自然科学の領土に於いて、力強く働いてゐた。

既に、リツハルト・アヴェナリウス Richard Avenarius (一八四三——一八九六)は、鋭い考察を以て、經驗批判主義、若しくは純粹經驗の哲學を説いた。けれど、彼れの所説と多分の類似を包有するにも拘らず、彼からは獨立に、此の方向に於いて、

一層の展開を果した者は、埃太利のエルンスト・マツハ Ernst Mach (一八三八——一九一六)である。彼はまた、物自體を排拒する。けれども、新カント派に反對して、彼は、重點を、全く知覺經驗の側わきに置く。茲に經驗と言ふ。けれどもそれは、所謂、知覺事實の如き形而上學的理念の抱合によつて濁らされてゐるものではなくて、全く、純粹の經驗でなければならぬ。斯くて、斯かる形而上學的附加物を排除し盡した成果として、マツハは、總ての實在は、全く感覺から成立する事を洞察する。例へば、物質の如きも感覺の、或る法則的結合に外ならぬ。感覺的ならざるものの如くに、意識に現れる所の總ては、要するに未だ十分に分析せられざるに過ぎない。學の任務は、此經驗の根本條件と、それら相互の從屬關係を明らかにし、此れを、方法論的關係に齎らして、學的命題に構成する事に存する。偕て感覺經驗の背後に、實體の存在を假定する事が、全然不要であると同様に、諸過程の內的連結としての因果性の假定は、不必要なる思考的の附加物にすぎない。

斯くの如き形而上學的色彩を荷ふ因果性の把住は、形而上學的理念から自由なる——單に量の從屬關係を云ふに留まる所の——數學的の函數概念によつて置き換へらる可きである。實在は、總て感覺から成立するのであるから、此の立場にとつては、物理學と、心理學との區別は、最早、對象の區別ではあり得ない。只だ、其の處置の仕方 of 區別にすぎない。蓋し、所謂物理學的對象と等しく、すべての感情、思考、意志作用等もまた、感覺によつて成立するが故に、そこに對象上の區別は存立し得ないのである。偕て、是等のものが、一つの或る感覺複合態、いはゞ有機態への、從屬關係に於いて、考察されるならば、そこには心理學が成立する。此れに反して、それ等が斯かる從屬關係から全く離されて、單に、それ等相互の關係に於いて考察されるならば、物理學が成立する。次にかの物理學者キルヒホッフ G. R. von Kirchhoff (一八二四——一八八七)等の古い實證主義が、世界の十全なる記述を以つて、學の任務としたのに反して、此の新しい實證主義は、これを生

物學的の視點のもとに考察して、學とは、生存競争に於ける、個體保存のための手段であると見る。是には、進化論の決定的影響を認めざるを得ない。即ち一言に云へば、學は思惟の經濟に基づくものであつて、學の用は、經驗の節用にある。

マツハの哲學上の影響は、殊に、埃太利、並びに獨逸に於いて著しい。即ち、リヒアルト・プーレン Richard Wahle (一八五七生)、アドルフ・シュテール Adolf Stöhr (一八五五生)、ハインリッヒ・ゴンペルツ Heinrich Gompeiz (一八七三生)、並びに、ハンス・コルネリウス Hars Corn lius (一八六三生)、ハンス・クラインペーター Hans Kleinpeter (一八六九生)等。

獨逸に於いては、テオドル・ツイーヘン Theodor Ziehen (一八六二生)は、經驗主義の最も意味ある代表者である。彼もまた、智識理論の圈内から、能ふ限り、形而上學的の要素を排拒せんと努め、マツハと似て、全實在は全く、感覺と表象とに分解する事が出来ると信じてゐる。斯くて、彼れの認識論は感覺主義である。

廣義の獨逸哲學に於いて、マッハとアヴェナリウスが類似の思想に到達したときに、米國に於いては、ペリー Ralph Barton Perry、ホルト Holt、ピトキン Pitkin、モンターグ Montague、スポールディング Edw. G. Spaulding、マルヴィン Walker、F. Marvin 等の協力によつて一九一二年、新實在論の提唱が宣せられた。それは、マッハ一派の經驗批判主義に、殆んど一致するものであるが、また、ジエームス、ラッセル、モリア G. E. Moore 等の思想にも近づいてゐる。(これらの人々については各其の項参照)。此の新實在論の建設者は、ウッドブリッジ L. E. Woodbridge である。そして、マックチルヴァリイ Ev. Br. Mac Givary は更に一層の展開を遂げた。伊太利のエンリケス Federico Enriques (一八七一—生)も類似の思想を抱懐してゐる。

第三節 實用主義

—Pragmatismus

現代の新しい實證論的な認識理論からの、一つの全く特殊なる變形は、實用主義である。夫れは、謂はゞ、ダーウィニズムの認識論と云ひ得るであらう。従つて、本來此の思潮は、既に夙に、自然主義時代に於いて、現る可きものであつたかも知れない。けれども、前世紀の第二半部に於ける、自然主義的ダーウィニズムの思潮の内部には、哲學に對する寧しろ大なる無關心があつた。従つて其處には、大なる哲學的成果は生れない。假令一方に、多くの眞摯なる思想家が、靜に思惟の道程に穿入してゐたとしても、彼等の思想が、眞に力を獲るがためには、哲學的要求そのものの大なる覺醒の時代を待たなければならなかつたのである。ダーウィニズムの如く、實用主義も、また、謂はゞ國際的の思潮である。勿論、全く

實用主義的なる生活背景を有する米合衆國が、優越的の勢力を以つて、此の思潮を開拓したとは雖も、既に、夙に此の方面に出づ可き決定的の思考が、獨逸の三人の思想家によつて起草されてゐた。而かも彼等の思想は、相互からは全く獨立に、各々独自の展開を遂げたものである。

即ち、先づ擧げらるべきものは、ハンス・ヴァイヒンガー Hans Vaihinger (一八五二生) の、理論的實踐的宗教的「Fiction」の體系としての、『かの様にの哲學 *Philosophie des Als-Ob*』である。彼は眞の認識とは實在の映寫であると言ふ見解を、必ずしも斥けはしない。けれど斯かる見解は、論理的に、是を支持する事は出來ない。寧ろ人間の認識は、一般に眞の實在には到達しないと考へられる。けれど、吾が眞理と云ふ可きものの驗證は、是を、實踐的實驗に俟つ可きである。認識は、實踐的の價值を有する事、夫れが總てである。人間は、生命的に、自己保存の目的のために、世界についての表象を作る。夫れが所謂眞實であるか否かは問はな

い。學的討究に缺く可からざる、原子、無限、自由物自體、絶對等の學的概念は、寧ろ、内部的の矛盾と背反に満ちて居る。従つて、夫れは、嚴正理論的に眞實である事は出來ない。けれども、夫れは「フィクション」である。フィクションとしては、思惟の領域における補助概念として、實踐的に、人間の生命そのものに關して意義を有つ。フィクションは、全く、自ら、論理的に、眞理たるの要求は有たない。けれども、實踐的使用の要求を有し、その限りに於いて價值あり、それ故にこそ、正當に支持されなければならぬ。吾々の表象構成態たる世界は、フィクションの錯綜である。論理的矛盾には充ちてゐやう。されど寧ろ、眞理とは、斯かる誤謬の最も目的に適へるものである。吾々の全生命は、實に、此のフィクションの上に支持せられ、展開されるのである。

次に、ニイチェ Friedrich Wilhelm Nietzsche (一八四四—一九〇〇) に於て吾々は是れに、親近なる思想を見出す。彼れの理想は、飽くまで人間的である。餘りに

人間的である。誤謬は人生に必然である。學的命題はすべて、統制的なるフィクションである。必然なる誤謬そのもので宜しい。彼は、斯かる思想こそ、カントの歸着する所でなくてはならない、と考へる。最後に、ゲオルグ・ジューメル *Georg Simmel* (一八五八——一九一八) は、是に、淘汰の思想をば附加する。生物學的な淘汰の成果こそ眞理である。種族保存のための合目的性、それが眞理性である。

——此れ等の考へ方は、通常の絶對的意味での眞偽の概念に對して、修正乃至改造の意を表明し乍らも、尙ほ之れが徹底的改造を遂げてゐない。彼等の弱點と言ひ得るであらう。此れ等の思想は、嚴密を好む獨逸精神に於いては、直ちに多くの追従者を有つ事は出来なかつた。一九〇〇年以後、類似の思想の流れが、米大陸から歐洲へと動いて來た時に、漸やく、それは蘇へつて來る。

米國に於いて、プラグマチズム(實用主義)の名は、一八七八年、チャールズ・サンダース・ペーヤス *Charles Sanders Peirce* (一八三九——一九一四) に淵源する。されど、

其最も廣汎なる展開はウィリアム・ジェームズ *William James* (一八四二——一九

一〇) に俟たなければならぬ。實用主義は、時として、人本主義、個人的理想主義、便利主義、又多元論の名に呼ばれる。それは、先天性並に純粹論理を排する所の、激しい經驗主義である。知性主義に對して、意志論的である。實在をば自己の中に見出す所の、人間中心主義である。實用主義は、體系であるよりも、寧ろ方法である。凡そ人々は、統一的なる意識を、實踐的部分と、理論的部分とに分裂してはならない。生命は完きものである。そして眞理とは生命に價値あると言ふ事ではなくてはならない。凡そ、人々は意志に従つて行爲する。人間の行爲なるものは、或る意味に於いては、永久の不思議である。けれどもそれは、生命の秘密を開く唯一の鍵鑰である。さればこそ、判斷、認識は、實踐的意義において理解されなければならぬ。判斷の眞理は、その實踐的歸結乃至効果に應じて、計られなければならぬ。役立つ所の行爲を保證し、生命の満足を確保せしむるもの

は眞である。従つて眞理は主観的であり眞理は流れる。知識するとは、目的に適合するに、體驗を整頓する事である。理論は、精神的活動の進展の道具である。例へば、神の概念は可なり眞である。蓋し、神の信仰は、之れを有する人の生命に於いて、無神論者が破滅に脅かされるが如き位置に於いても、内的堅實なる把住を與へるからである。斯くて眞理とは、まさしく、善の一種である。知的確信の範圍に於いて、或る理由から善として證明せらるゝ總ては眞である。

實用主義は、またジョン・デューイ John Dewey (一八五九生) の道具主義 Instrumentalism 若しくは實驗主義 Experimentalism となる。眞理とは、知識のよりよき効用のための道具である。彼れの哲學は、經驗發展の理論、若しくは、知識獲得の體系である。彼に従へば、先づ無反省的の經驗があり、次に反省的の經驗が來り、かくして吾人の經驗は發展する。現在の經驗状態が、其處に生起したところの矛盾をば、最早や解釋し得なくなるときに、ここに反省が起つて、此の矛盾に満ちた現在を修正する。此の連続が、知識獲得の體系である。かくして、彼は、シカゴ學派を率ゐて行く。

獨逸に生れ、オックスフォードに教授たるシラー E. C. S. Schiller (一八六四生) は、歐洲に於ける實用主義の重鎮である。彼は、認識論的に一層の展開を遂げて、人本主義 Humanism を説く。即ち、彼は、先天的處置を排拒して、人間經驗の全野から出發する。眞理は、人間の動機並びに必要によつて規定される。人間そのものこそ、總てを計る尺度である。なほ、彼は、同時に、眞理の標準として、社會的の効用性を力説する。

尙ほ、此の英米流の實用主義は、また、伊太利、並びに、佛蘭西にも影響を與へてゐる。伊太利には、殊に、パピニ Giovanni Papini (一八八一生) が居る。獨逸に於ては、一九〇八年ハイデルベルヒ、並びに、一九一一年ボロノニアの萬國哲學者會議に於ける論争に見ゆるが如く、寧しろ、多くの反對を受けてゐると言へやう。たゞ

「イエエルサレム Wilhelm Jerusalem (一八五四生)、『ヤコービー Günter Jacoby (一八八一生)等が、多少この實用主義に近いものと謂ひ得るであらう。

第四節 歴史科學の認識論

(形式的の歴史哲學——Formale Geschichtsphilosophie)

自然科學の認識論的構成に向けられた過重の關心、自然科學の偏重、自然科學によつて制約せられたる經驗論的懷疑論的傾向。それらに對して、理想主義的の反流が、時とともに水勢を増す。かくて、ここ認識理論の領域に於て、現代が産み出したる主要なる事業は、精神科學の認識論の建設である。けれど其處には、未だ、全精神科學の全土を覆ふべき、其の認識論たらんがためには、なほ未耕の領土が残されてゐる。かくて、夫れは、自らを制限して歴史科學の認識論と謂ふ。

現代の歴史學の認識論に對して、最初の而して、廣汎なる成果を産み、最も主要なる動力を借したものは、優れたる心情と透徹する洞察の所有者、ウィルヘルム・ディルタイ Wilhelm Dilthey (一八三三——一九一二)である。現代の哲學におけ

る彼の光耀がここに存する。彼は、他の諸學者と異つて、最も傑出せる精神科學の研究者として、就中、歴史研究上の傑れて豊富なる實際上の智識をば携へて、二十世紀の轉向期へと現れてきた。彼もまた、据礎としての形而上學に對する嫌惡をもつて、時代の思潮に其貢を齎したと同時に、けれど、自然科學の獨裁を精神科學的歴史學的研究にも移入せんとするが如き、精神の自己侮蔑に誘はれることなしに、彼は、自の精神歴史學的勞作に於いても、認識論的勞作においても、此等の學の固有の本性と獨立とに對する洞察の眼を曇らされはしなかつた。精神科學は己れ自らの基礎の上に立たなければならぬ。自然科學が、ただ感能的知覺と悟性とをもつて事とするに反して、精神科學の認識に當つては、統一的全體としての人間が活らかなければならぬ。茲に、兩科學の最深の區別が存する。即ち、精神科學に於いては、普遍妥當なる實在認識、價值規範規定、目的定立が結合されてゐるが、その基礎には、精神生命の統一的全體、若しくはその組織的

構成態がなければならぬ。それ故に、歴史學の主要なる對象は、個性體である。勿論、歴史學は、ただ人間のみを論ずるのではなくて、また、藝術品、記録等の如き、材料的物件も、その考察にはいるけれども、然しながら、歴史的世界の決定的要素を構成するものは、恒に個性體であつて、それが始めて、客觀的なる文化事實を産み出すのである。さて、吾々は、自然をば説明し得るけれども、これを理解することには出來ない。しかるに、精神生命をば、吾々は理解するのである。吾々は、精神的歴史的過程をば、吾々の想像ファンタジーの中で追感することによつて、これを内的に理解することが出来るのに反して、自然的過程は、全く吾人の内的理解をば許さず、ただ吾々がこれを悟性的に概念し得るにすぎない。即ち、自然は、吾々には、一般にただ現象の形式に於いてのみ與へられて、自然そのものの眞實において與へられはしない。然るに、心的なるものは、直接吾々自らの裡に通ずる。而して、吾々が、依つて以つて、他人の精神生命を理解し把握するところの機能は、精神的想像で

ある。想像とは、悟性的概念的の思惟過程ではなくて、精神の全側面を要求する所の能作である。従つて、一個性體の固有の生命、體驗が愈々豊富であるにつれて、それだけまた、他人の精神的存在を追感的に理解し得る彼れの能力も、また従つて増大する。歴史家の任務は、素材的な生の材料なる事實を、悟性的に規定する事ではなくて、これらの材料に對して、追感的綜合的解釋を施すことにある。この意味において、眞の精神科學——従つて歴史學の追究者の仕事は、藝術家の仕事に、極めて親近である。只だ、前者は、後者に異つて、常に過去の現實の解釋へと向ふけれども。

デイルタイは、多くの追従者を有つてゐる。そこには、殊に、マックス・フリップシュアイゼンケラー Max Frisch-isen-Köhler (一八七八生)、ゲオルグ・ミッシェル・Georg Misch (一八七八生)、ヘルマン・ノール Hermann Nohl (一八七九生)、エドゥアルド・シュプランゲル Eduard Spranger (一八八一生)等が、擧げられるであらう。

新カント派の中では、特に著しく、バーデン學派が、歴史學の認識論的構造の問題を取り扱ふ。(バーデン派の項参照)。既に、ワインデルバントは、嚴に、自然科學と歴史科學とを峻別する。前者の概念構成が、一般化的抽象に基くに反して、後者は、個性化的事實を論ずる。前者は法則的であり、後者は事象的である。この彼の思想を繼承して、現代における最も包括的な歴史哲學を建設しつゝある者は、リッケルトである。彼もまた、自然科學と文化科學(歴史學)とを、相互に乖離せる全く異なる二つの型として峻別する。前者は、無限に多様な所與を一般化的に抽象して、概念と法則によつて、これを征服し盡さんとするに對して、後者は、全く個性的なるものに立つて、對象の特性を獲捕する。前者は、現實態の等質的連續に着目し、後者は、異質的、個性的、一回性的なるものを看取する。前者の處置は一般化であり、後者の處置は個性化である。自して、バーデン學派は、數學的自然科学者としてのカントの偉大さに、より多く親しみつゝあるマールブルヒ學

派と異つて、重點を歴史學の上に置く。此事は、全く彼等の價值哲學と結びつくからである。即ち、およそ歴史家は、總ての個性を取り扱ふわけではなく、其處には、撰擇が行はれなければならない。この撰擇の標準となるものは、文化價值である。蓋し文化とは、普遍的價值の體系である。文化價值に關與するもののみが、歴史的事實である。かくして、正當なる哲學が樹立されなければならない。同じ傾向から出でて、ラスクもまた、歴史の認識論を、殊にフイヒテの歴史哲學を考察する。

等しく新カント主義の地盤から出でながら、全く異なる方面から、歴史の認識問題を論ずるものに、ゲオルグ・ジムメル Georg Simmel (一八五八——一九一八)がある。彼の研究は、主として、歴史家が見出されたる素材から、如何なる仕方で、所謂歴史なる精神的構成體を作るかといふ、其仕方の研究に關するものである。自然の研究が、批判主義の理解に従つて、感覺的材料を用ゐて、悟性の根本概念(範

疇)の力によつて、自然といふ思考的構成體を形成するが如くに、所謂歴史てふ精神的構成體の建設に際しても、また、先驗的機能が必要である。即ち、史的先天性の共働を要する。歴史の認識の對象は、人格の表象、感情、意志であらう。即ち、精神的過程の内容的考察であらう。けれど、其處には、先天性の假定を必要とする。歴史は、決して、主觀精神から獨立なる客觀的事實の再建ではない。歴史において、主觀に對して獨立なる實在をば、認識によつて再現的に把握することを論ぜんとする。素朴的なる歴史學の概念は、一般に、新カント的の認識論の考へ方に置き換へられなければならない。即ち、認識せられたるものは、認識過程を通して、甬めて成立するのであつて、認識そのものから獨立に自存するのではない。歴史もまた、一つの認識論的構成體であるが故に、歴史においても、歴史認識一般の制約に關する研究が必要である。

歴史學に關する、これらの認識論的研究は、本來、歴史そのものの内容を論ずる

のではなくて、『歴史の學』を論ずる限りにおいて、歴史哲學の一分科として、現代哲學上の新傾向に屬するものである。歴史經過そのものの上に向けられた哲學的考察、即ち内容的の歴史哲學は、現代に於いては、未だ主要なる位置を取るに到らない。(なほ此、内容的の歴史哲學に關しては、多少、後段に述べるであらう。)

以上のほか、なほ同時に、歴史の認識論を取り扱ふものに、佛蘭西にありては、ポウル・ラコムブ Paul Lacombe、ベルヒ H. Berr 等がある。ルウマニアのクセノボル Alexander-Demeter Xenopol (一八四七生)も、傑れたる歴史哲學者である。(一般に、歴史哲學に關しては、後段第五章第二節第六項を参照)。

第三章 心理學の瞥見

十九世紀の後半部に於ける、反形而上學的傾向は、上述の如く、一面に於いては、哲學的勞作を驅つて、批判主義、實證主義、經驗主義の認識論に赴かしめたと同時に、他面においては、廣義の哲學的諸分科の各々への、狭い沈潜の傾向を刺戟したと考へられる。その中で、本來の哲學に、より多く關係づけられんことを欲したものは、就中、心理學である。即ち、時としては、心理學を以つて、哲學の基礎學たらしめんとする、一種の汎心理主義の成立を見る。時としては、心理學者、彼は同時に哲學者であり、哲學者、彼は同時に心理學者であつた。併し乍ら之と同時に、本來の哲學の國土における、反心理主義的傾向、論理主義的優越は、勿論看過さる可くもない。

次に、現代哲學思潮を理解するの資たる限りに於いて、極めて簡単に、最近の心理學の一般を瞥見しておかう。

現代に於ける、心理學の成果は、哲學における、認識論の夫れに比す可く廣汎である。而かも、心理學は、認識論よりも早く、自然主義的時代に於いて、既に注目せらる可くあつた。けれど、斯くあつた所以は、心理學が、寧ろ自然科学たらんと準備したと言ふ内部の變化に負ふものである。即ち、方法としては、内省の代りに、夫れと全く異つた所の、實驗的方法を取る。實驗心理學としてこそ、近代の心理學は、凱聲を擧げる。これが現代心理學の特性であり、強味である。が、また此の事が同時に、哲學から心理學を分離せんとする、廣汎なる傾向へと導いて行く。大學は、器械装置に満ちた實驗室を、心理學のために備ふると同時に、心理學の講座は、哲學の講座から、嚴密に區別されやうとする。

フエヒネル *Gustav Theodor Fechner* (一八〇一——一八八七) は、精神物理學 *Psychophysik*

と言つた。抑も、實驗心理學は、精神物理的問題を経験的に解釋すべく成立した。生理學との密接なる關係に立つて、感能知覺をば、實體的に試験しようとした。併しながら、現在の實驗心理學は、最早、この精神物理的問題を、左程中心には置かない。寧しろ、實驗に近づけ得べき心的體驗の總體を、學的に取り扱はうとする。嘗ては、感覺の問題が主要であつたのに、今日では、實驗心理學は、其の勞作を、精神生命の全域に擴充する。斯くて、功績ある勞作を出しつゝあるものに、大體において、四つの學派を數へることが出来る。即ち、

(一) ライプツヒ派 *Leipziger Schule* —— ヴント *Wilhelm Wundt* (一八三二——一九二〇)

(二) ゲツチンゲン派 *Göttinger Schule* —— ミュラー *Georg Elias Müller* (一八五〇生)

(三) キュルヘ派 *Kilpesche Schule* (前には *ヴェルツブルグ派 Würzburger Schule* と

呼ばれたもの)

(四)ベルリン派 B. riner Schule——シュツンプ Carl Stumpf (一八四八生)

これになほ、埃太利に於ける、

(五)グラーツ派 Grazer Schule——マイノング Alexis Meinong (一八五三——一九二〇?)

を加へる。

宛かも、物理學に於いて力學が夫れである様に、實驗心理學が、全精神科學の基礎學となつて展開するだらうといふ希望は滿されてゐない。寧しろ反對に、現在に於いては、次の如き廣汎なる確信が存在する。即ち、實驗心理學は、心理學の總てではなくて、むしろ、其の一部にすぎない。心理現象の學的處置に於いて、實驗は、實驗として、そのまゝ、無條件的の決定を與へることは出來ない。寧しろ、實驗に於いては、觀察者その人の個性が、最後の決定を與ふべき契機でなくてはな

らない。且つ、今日既に、吾々は、實驗的研究は行きつまつたといふ印象から、逃れることが出來ない。従つて、茲には、實驗心理學の應用方面に向はんとする傾向が、著しくなつてくる。この方向において、今日、特に顯著なるは、教育心理學である。獨逸に於いて、此の方向の開拓者として、エルンスト・モイマン Ernst Meumann (一八六二——一九一五)と、ウィリアム・シュテルン L. William Stern (一八七一—生)とを擧げる。

勿論、實驗心理學が、彼に許されたる領土に於いて、爲し得たる事業の功績を、吾はすべて承認する。それにも拘らず、なほ、次の事情を看過する事は出來ない。即ち、心理學が、自然科學と提携したこと、その事が、同時に反つて、自然科學に保有せらるゝ自然主義的の誤謬を、多分に、心理學其のものゝ中に潜入せしむるの結果を生むだ、と言ふことは、否定することが出來ない。斯くて、『心のない心理學 Psychologie ohne Seele』(ザント)が成立した。彼等は、個性の心をば、心的現象の複

合若しくは、諸機能の單なる連鎖から成ると考へる。蓋し、斯くしてのみ、心的なるものと、物質的自然との類比が、完全になるからである。更に、重大なる心理學の偏見と見らるべきものは、思惟過程をば、表象に還元したることであつた。此の傾向と提携したものは、一層一般的なる觀念聯合主義であつた。(ミューラー Georg Elias Müller、ツィーケン Theodor Ziehen 等)。けれども、兎に角、これらの考へ方が、自然科學を範に取つて以來、獨逸の心理學界に、多大の影響を及ぼした事は事實である。一部に於いては、今日でさへも、なほ、哲學一般に對する強い嫌惡が表明されてゐる。

けれども、こゝ十數年以來、心理學は、自然主義的の成心から、離昇せんとする、一つの新しい反動に目覺めてゐる。此の覺醒の出發點を準備したものは、思惟作用の研究であつた。之れは、既に長いあひだ、殊に若い研究者たちの心惹かれる勞作の對象であつた。此思惟の心理學に、主要なる動機と功績とを與へたもの

は、もとより、實驗的研究ではなくて、寧ろ實驗的研究からは輕視されてゐた所の記述的心理學であつた。そして、此の功績は、先づ、ブレンタノ Franz Brentano (一八三八—一九一七)の學派に歸せられる。しかも、偉大なる成果を齎したものは、第一に、フッサル Edmund Husserl (一八五九生)の『論理的研究』である。(この兩者については、後段参照)。

哲學への顧慮に於いて、此の記述的研究の主要なる論理上の成果は、先づ作用論若しくは機能論である。而して次に、特殊なる「自我」即ち「心」の假定への復歸である。——リップス Theodor Lipps (一八五一—一九一四)、キール Oswald Külpe (一八六二—一九一六)、エステルライヒ T. K. Oesterreich (一八八〇生)、ガイゼル Josef Geysler (一八六九生)、フッサル等。——彼等に従へば、心的體驗に於いては、其主觀的方面と、其の客觀的方面——作用が、意味的に向けられてゆく所の、内容若しくは對象——とを、區別すべきであると考へる。此の規定は、また、認識論にと

つても、著るしい意味がある。蓋し、意識内容はすべて、自我の「状態」の意味での、精神的のものであると言ふ古い考へ方が、打破されるからである。

更に他方に於いては、また、哲學的意識の強まると共に、心理學の他の部分——即ち、實驗的の處置にも、また、ブレンタノ、リップス、グロース、MEHLIGOS(一八六一生)、マイエル、Heinrich Maier(一八六七生)、フッサル、マイノング等の記述的研究にも、這入らない爾餘の部分——に對して、廣汎なる注意が向けられて來た。歴史的精神科學の基礎としての、純粹記述的、分析的、心理學の創設に對する、ディルタイ Wilhelm Dilthey(一八三三——一九一一)の要求は、精神科學の全野に亘つては、未だ着手されてはゐないけれども、其の個々の部門に於いては、多くの進涉を遂げてゐる。アントン・マルティ Anton Marty(一八四七——一九一四)は、またブレンタノの學徒として、言語心理の方面を開拓した。宗教心理は、獨逸に於いて、特にエステルライヒに依つて、個性心理は、シュテルンに依つて、それぞれ着手され

た。更に、最も廣汎なる企畫は、ヴントの民族心理學である。それは、言語、神話、藝術、風俗、習慣等の範圍に於ける、民族的發達過程の心理學的研究である。

其の他、哲學部内の諸領土の上に及ぼした、心理學の影響に關しては、部分的に可なり著しいものがあつた。就中、心理學的分析の異常なる細密さは、例へばカル・マルベ Karl Marbe(一八六九生)の夫れの、認識論に對するが如き、看過すべからざる効果を與へてゐる。けれども、それと同時に、一方には、心理學を以つて、全精神科學の據礎たらしめんとする傾向は、むしろ、欲ましからざる結果をば招致した。特に、論理學に關して、いはゆる心理主義の出現は、論理學そのものゝ損傷でなければならぬ。即ち、此の心理主義は、「心的」と「論理的」とを混淆する。例へば、命題間に存する論理的法則(推理の法則の如き)を、誤つて、心理學的の思惟法則と觀る。若しくは、矛盾則とは、或る表象は關係的に思惟せられ得ない、と言ふことに外ならないと解釋する。十九世紀末に廣汎であつた此の心理主義は、

けれど、現在に於いては、最早不當なる要求に出づることは出来ないであらう。
 — そのほか、論理學的方法論の上に及ぼした、心理學の影響も可なり著しい
 (ツント)。諸學に於ける思惟方法は、心理學的に分析された。心理學的分析の地
 盤から出でた論理學としては、ベンノ・ヘルドマン Benno Erdmann (一八五一—
 一九二二)のそれを擧げる事が出来る。

獨逸以外に於いては、實驗心理學諸般の發達は、特に、米國を擧げる。就中、哲學
 的に興味あるものは、ウィリアム・ジェームス William James (一八四二—一九
 一〇)の宗教心理學の建設である。佛蘭西のビネー Alfred Binet (一八五七—一
 九一一)は、特に、思惟推理の心理學に貢献した。

病的心理、變態心理の研究は、殊に佛蘭西に於いて成果を收めた。即ち、リボー
 Théodule Ribot (一八三九—一〇一七)、ジャンネー Pierre Janet (一八五六、九生)、ビネー
 等。——此の方面の研究は、獨逸に於いては、寧ろ缺如してゐたが、最近、其研究

も漸く盛んならんとしてゐる。ヤスベルス Karl Jaspers (不詳)、シュベヒト Gust
 av Specht (一八六〇生)、シュテーリング Gustav W. Stoerring (一八六〇生)、クロンフ
 ルト Kronfeld、ホステルライヒ等。——英米に於ては、Parapsychologie 即ち
 千里眼、透視等の研究が行はれる。Society for Psychical Research —— ジェームス
 W. James、トイヤーヌ Myers、ハチソン Chadworth H. Hodgson (一八三二—一九
 一一)、クロフォード Crawford 等。——佛蘭西、瑞西、伊太利も、此の研究に關與
 する。リシエ Charles Richet (一八五〇生)、フルールノワ Théodore Flournoy、モル
 セリ Emilio Morselli (一八五二生)、ボッタッツイ Buttazzi 等。——英、米、佛の心理學
 は、一般に、潜在意識を承認するが、獨逸に於いては、大體、此の方途に赴くものは、フ
 ロイド Sigmund Freud (一八五六生)の一派があるのみである。

第四章 認識論(其の二)

第一節 合理論的思潮

以上に考察したる、現代の哲學思潮は、自然科學を批評して、カントを祖述せんとする、認識論的論理主義も、經驗の意味の徹底より出發する根本的經驗論も、其の固有の展開をば、新世紀に於いて見出したとは言へ、其の根柢は、古く、自然主義の時代に根ざしてゐる。然るに、現世紀に到つては、自然主義的世界觀を捨てて、全く新なる、根本的世界觀改造の必要、哲學の任務をより高みに置く可き可能性を、科學そのものが告白する。科學が、世界の根本の謎を解いた、と言ふ自然主義的確信、哲學的思惟にとつて、自殺的なる、この確信は、再び遠く退いて行く。まさしく根本的に、新なる世界觀が、獲得されなければならぬ。眞理に對する思慕

の情熱と精神の偉力に對する確信とを以つて、新たに武装せられたる哲學は、今や絶對の必要として要求される。生命が心的要素の自然論的構造に於いて考察される代りに、生命は再び其の固有の光華に於いて輝かなければならない。斯くて現代は、全く新なる一面の思潮をば産み出してゐる。

斯くして茲に、認識論的乃至論理學的の範圍に於いて、二つの新しい傾向が生れた。フツサル一派の現象學(マイノングの對象論をもこめて)と、レームケ一派の基礎學とである。兩者は、內的の類似にも拘らず、相互に、大なる接觸なしに並存的に發展して來た。而して、今や、それ等の思潮は、その故郷なる獨逸の國境をこえて、遙かに送り流れて行く。

第一項 現象學並に對象論

— *Phänomenologie und Gegenstandstheorie*

そのうち、獨逸並に埃太利に於いて、最も注目す可きものは、現象學の思潮であ

る。現象學は、精密には、兩世紀の分歧線上に生れたと言ひ得るであらう。(一九〇〇—一九〇一年は、フツサルの論理的研究の現はれた時である)。そして、此の思潮は、もともと、單に論理學圈内の一改造として、現れたものであるが、併し乍ら、漸くにして、哲學の全野に於ける、革命へと展開して行く。現代の主潮、新カント派が、カントの精神に歸らんとするに對して、此の思潮の中には、ライブニッツの精神が息づいてゐる。(十分意識的ではないとしても)。けれど、此思潮の直接の生起は、これを、埃太利の哲學者フランチツ・ブレンタノ Franz Brentano (一八三八—一九一七)に俟つものである。彼は、カトリックの僧より出でて、アリストテレーズとスコラの哲學(特にトーマス・アクイナス)を通して、論理的に卓抜なる訓練を経て哲學に入り、更に、心理學に新機軸を開いて、據つて以つて、現代に於ける一大思潮の源泉となつた。彼は、凡そ現代の意味ある哲學者の中で、カントの獨裁に對して、意識的に競はんとしたる、恐らくは、唯一人者であらう。そして、彼の鋭い

批評と廣汎にして且つ深徹なる勞作の、けれど内氣な暗示の中から、彼の學徒の努力と勞作の廣大なる流れとなつて、現代獨塊の全現象學的思潮が現れて來た。塊太利に於いては、此の思潮は、アレキシウス・マイノング Alexis von Handschuehsheim Meinong (一八五三—一九二〇?)の、對象論の名に現れる。獨逸に於ては、エドムンド・フツサル Edmund Husserl (一八五九生)が、現象學の建設者となる。

なほ、フツサルの思想の淵源には、いはゆる獨塊學派の先驅者として、ボルツァー Bernard Bolzano (一七八一—一八四八)のあることと、並びに、ブレンタノよりフツサルへの思想的過渡に、その勞作の量に於いては、尠いが、質に於いて偉大なる、ポーランドのトルドウスキー Kasimir Twardowski (一八六五生)のあることを見落してはならない。

マイノングとフツサルの兩者の間には、時として、先後の問題が議せられるけれど、彼等は、確かに相互から獨立である。それにも拘らず、彼等は、等しく、ブレン

タノに於いて方向づけられてゐるのである。

今日、マイノングに協働する者には、ルドルフ・アメゼダー Rudolf Ameseder、ヘルンスト・マリー Ernst Mally、ウィルヘルム・フランクル Wilhelm Frankl、ヴィットリオ・ベヌッシ Vittorio Benussi、ウィルヘルミーネ・リール Wilhelmine Liel、ロベルト・ザックシンガー Robert Saxinger 等がある。

そして、フツサルに追従する者には、アレキサンダー・ブヘンダー Alexander Pfänder (一八七〇生)、マックス・シェラー Max Scheler (一八七一生)、モーリッツ・ガイゲル Moritz Geiger (一八八〇生)、アドルフ・ライナッハ Adolf Reinach (不詳)、パウル・リンケ Paul Linke (一八七六生)、ディートリッヒ・フォン・ヒルデブランド Dietrich von Hildebrand (不詳)、ヘルマン・リッツヘル Hermann Ritzel (不詳)、ヘドウィヒ・コンラド・マルチウス Hedwig Conrad-Martius (不詳)、ウィルヘルム・シヤップ Wilhelm Schapp (不詳)、エミール・ウチッツ Emil Utitz (一八八三生)等

がある。

ブレンタノの心理學は、精神現象と物體現象とを別つて、精神現象の特徴を對象の内在と言ふ點に見出した。意識するとは、對象即ち意味を、己れ自らの中に含むと言ふ事である。斯くて、總ての精神現象は、意識内容即ち内在的對象と、作用との兩方面を具へる。此考へ方を繼承して、トワルドウスキーは、表象に於て、作用と内容と對象との三つを峻別する。茲に於てか、次に起る可き問題は、此の三者の關係を思惟する事である。此の使命に應ずるものは、フッサルの現象學である。即ち、現象學は、此れ等の區別の、未だ成起せざる以前の立場、即ち、純現象學的立場を以つて、出發點とする。さればこそ、現象學は、まさしく、學的哲學一般への、最初の出發であつて、之れに對しては、總て從來の哲學は、前程段階たるにすぎない。いまより以後、哲學は、數學の嚴密さと可證性とを有つて、原理の上に原理を建てる事に於いて、一步一步と進展すべきである。此の目的への道程をば、

フッサルは、一の新しい方法に見出したと信ずる。即ち、それは、現象學的方法でなければならぬ。

總ての經驗科學が空間、若しくは、(或は、並に)、時間の中に、現存する所の事實を以つて、事とするに對して、現象學は、事物の純粹論理的、超時間的本質を以つて、事としなければならぬ。現象學の問ふ所は、例へば、色彩とか音響とかは、存在するか否か、何處にあるかと言ふ問題ではなくて、彼は、まつしぐらに色彩、音響の本質を問はんとする。本質は、事實と別けられる。前者に對する本質學、後者に對する事實學である。現象學は、また、本質學の一でなければならぬ。されば、現象學は、全く、空間時間的見方を捨てて、例へば、色及び音の——従つて總ての事物——の存在本性に沈潜する事に於いて、其の本質の認識に達する。純粹意識の立場に立つて、一種の本質直觀に於いて、其の認識へと迫進する。凡そ、吾々の直接經驗は、無限の流動であるが、此の流動を、或る一の立場から止めて見た時に、

種々の世界が出来る。斯くて、學的知識とは、孰れかの立場に立つて、何等かの先天性を以つて、此無限の流動を止めた所に成立する。けれど、それ故にこそ、此れ等の世界はすべて、純粹意識によつて結合されてゐる。斯くて、是等の諸々の立場をば、悉く除去して、純粹意識の直接なる姿を、記述せんとするものが現學象である。されば、唯だに、個々の事物のみでなく、現實態の全體が、現象學的考察の對象と爲され得る。斯くて、異別的なる、事實的なる、經驗的個別學とは別に、斯かる本質直觀の組織として、純粹本質學が成立する。それは、現實の各部の本體を規定する。されど、是等の本體上の本質學、本體學オントロギと並んで、また、形式的論理學、數學の如き、純粹形式的性質の學がある。是等はすべて、非經驗的であり、先驗的であるが、併し乍ら、例へば、物理學に對する數學の如く、實證諸學に對して、其の基礎となるものである。蓋し、現實はすべて、まさしく、これ等の先驗的構成法則のもとに立つからである。斯様に、一般的の意味に於いては、フツサルは、自ら、現象學と

言はずに、本質學と言ふ。現象學は、本質學の一種、若しくは、更に其の基礎たる可きものである。總ての學の根柢には、直接なる體驗としての、純粹意識の世界がなければならず、斯る純粹意識の世界をば、あらゆる立場から離れて、把握せんとする現象學は、實に、學の學でなければならぬ。換言するならば、それは心的機能の本質を研究する。心理學の本質的據礎を論ずる。本質的の意識内容は、決して空間時間的存在を有つに非ずして、純粹理念的存在である。けれど、然ればとて、夫は、謂はゞ、只だ、意識の内に存在すると言はる可きではない。人々は、夫れを、意識に齎す事も、また、然かせざる事も可能である。それ自身は、それ自身の存在に於いて、存在する。スコラ哲學の論理的實在論を、單に、概念の謂はゞ、感能的存在を説く者の如く、粗雑に理解しないならば、茲に、フツサルとスコラ哲學との、密なる接近を認めると言ひ得るであらう。また、フツサルの現象學は、カントとライブニッツ、ヴォルフとの間に、橋梁を架するものとも言ひ得るであらう。更

にまた、現象學の考へ方は、カントの先驗的心理學に接近し得るであらう。フツサルは、リツケルトの意識一般の思想を取り入れて、最近に於いては、以前よりも遙かに新カント學派に近づかんとしてゐる。

現象學の根本思想の影響は、殊に、獨逸の若い研究者たちの上に、多様に、意義あるものとなつてゐる。リツプスの如きも、愈々茲から遠ざかる事は出来ない。新カント學派、就中マールブルヒ派の認識論的追求にも、この現象學的思潮との接觸が新しく現れてゐる（ニコライ・ハルトマン）。吾々は言ひ得るであらう、現象學は新カント學派の地位を奪ふと。

フツサルの現象學が獨逸に於いて、哲學の新生面を開拓しつゝある時に、埃太利に於いては、マイノングが類似の思想を提げて、新哲學の建設にといそしむ。彼もまた、ブレンタノより出でて、即ち、其の内在的對象の思想を徹底する事によ

つて新哲學の領土を開拓し、これを、對象論と呼ぶ。對象論は、世界の實在の規定を論ず可き、實在の學にあらすして、意味の學である。對象論は、客觀を論ずるに非ずして、客觀的を論ずる。客觀は、存在するものであるが、客觀的は、成立するものである。マイノングの謂ふ所に從へば、學は、恒に必ずしも實在をのみ論ずるものではない。寧ろ、時としては、實在せざるもの、否、不可能なるものをさへも論ぜんとする。例へば、論理學は、木質の鐵の如き、不可能なる對象を論じて、此の種の矛盾せる事物の不可能なる所以を説く。實在を豫想せる、實在のための成心は、征服されなければならぬ。思考の中に、現れて來るだけの總てのものは、思惟の對象となり得る。例へば、球の性質を研究するには、必ずしも、球體の存在によるの必要はない。そこに、對象一般の學が成立しなければならぬ。茲に、對象とは、思惟の、一般に可能なるすべての内容を意味する。而して、其の處置は、純粹先驗的である。例へば、數學は對象論の一部である。

フッサル並びにマイノングの哲學は、先づ第一に、無條件的に絶対確實なる認識を期望する。次に、彼等は存在の窮極の構造に迫進して、實在の本質、實在の意味を探求する。さらに、彼等は、空間時間の彼岸に立つて、永遠の力に統べられたる、純粹論理の世界への眼を開いた。彼等の哲學が、非常なる熱心を以つて、迎へられた所以である。斯くて、彼等の出發點が、一見甚だ平凡なる、論理學であるにも拘らず、現象學と對象論とは、異常なる興奮と、共鳴を喚起し、斯くて、新なる世界觀のための努力に、深い痕跡を印せんとする。廣義の哲學の領土に於いて、現象學的方法の應用を見ざる所は、殆んど無いと言ひ得るであらう。

即ち、まづ、倫理學に於いては、第一にマックス・シェラーがある。彼は、現象學の基礎に立つて、價値の顛倒へと、前進する。顛倒、それは本質に於いて、キリスト教

的、カトリック的價値への復歸である。即ち、禁慾的の、中世的の聖者型が階級上、明らかに、最高の存在型式であると考へられる。同時に、茲には、價値が、事物の客觀性質と見做される意味に於いて、價値客觀性の理論が復起した事は、注目に値する。法理哲學の範圍に於いては、アドルフ・ライナツハが、總ての成立法からは獨立に、絶對的妥當を有す可き、法の先天的基礎を發見せんと試みる。モーリツツ・ガイゲルは、審美感の現象學を論じ、エミール・ウチツツは、一般藝術學を論じ、共に、美學の範圍に於いて、フッサルの指示したる道程を進む。パウ・リンケは、現象學的分析を以つて、實驗心理學に貢献する。其の他、アレキサンダー・ブヘンダーは、心理學並に論理學に、デイトリッヒ・フォン・ヒルデブランドは、倫理學に、ヘルマン・リッツェルは、概念の現象學に、ウィルヘルム・シヤップは、知覺の現象學に、各々眞摯なる勞作を出しつゝある。

最近、現象學が、最も新しい藝術家の一團に、迎へられつゝある事は、吾々の興味

を惹く。即ち、藝術史上、最も近代的なる思潮、即ち表現派が、其の藝術理論——表現派の藝術家は、物の本質と其の形而上學的の起動力へと、直接に衝迫する、と謂ふ理論——をば展開せんがために、甚だ不分明な仕方ではあるが、此の現象學を利用せんとしつゝあるのである。(ブルガー Fritze Burger)。

第二項 基礎學としての哲學

——Grundwissenschaft

現代の理想主義的思潮の一派に、ヴィルヘルム・シュツペ Wilhelm Schuppe (一八三六——一九一三)、アントン・ファン・レクレール Anton von Leclair (一八四八生)等に依つて、代表せらるゝ所の、所謂意識一元論 Bewusstseinsmonismus 若しくは内在的哲學 Immanenzphilosophie なるものがある。理想主義的思潮一般と等しく、内在的哲學もまた、純認識理論的關心に導かれて、形而上學を拒斥する。彼等に従へば、經驗は總て、意識に内在する。従つて、經驗一般は、即ち、自己の意識内容の主

觀的經驗である。吾々の思惟なしに物は、存在しない。吾々の意識なしに、經驗は存在しない。實在するとは、意識されると等しい。對象即ち表象であると言ふ。此の意識一元論(内在的哲學)は、嘗ては、可なり強力なる主張であつたけれども、今日に於いては、既に漸やく學界の承認を失墜せんとしつゝある。

併し乍ら、此の内在哲學から出でて、而かも、獨自の武歩を進めて、現代哲學の一角に、重きを爲さんとしつゝあるものに、ヨハンネス・レームケ Johannes Rehnke (一八四八生)一派の、基礎學の主張がある。従つて、基礎學は、其の出發點に於いては、フッサール一派の現象學とは、全く異なる所の源泉に由るものであるけれども、其の主張には、今日多くの點に於いて、現象學との著しい類似を舉示してゐる。其の影響する所も、勿論、現象學に比す可くもないが、レームケは、一九一九年十月以來 Johannes Rehnke-Gesellschaft を創設し「基礎學」(Grundwissenschaft)と呼ぶるゝ年四回の定期刊行物を武器として、認識論、並に、形而上學的世界詩に反對して、眞の

哲學の樹立の爲に戦はんとしつゝある。例へばヂミトリ・ミハルチェフ Dimitri Michaltschew(一八八一—生)は、レームケの立場に立つて、リッケルト、フッサル等に對して、殊に、其の存在當爲の二元論並に、「意識一般」に對して論争の鋒を向ける。

レームケもまた、現象論的思潮に類似して、哲學について、直接の意識内容——彼の言葉を用ゐれば、「所與一般」——の、最普遍的、事相の分析を要求する。哲學は所與から出發しなければならぬ。蓋し、所與とは、吾々の意識する、若しくは、意識せられる所の總てである。(彼れの所與一般とは、根本に於て、マイノングが對象と呼ぶ物に等しいであらう)。此の所與に對して、哲學は、最普遍的規定を明らかにしなければならぬ。例へば、判断するとは、普遍的所與によつて、具體的所與を規定する事である。即ち、所與は又、個的なるもの(具體的なるもの)と、普遍的なるもの(概念)とに別れる、そして、具體的なるものは、普遍的なるものから成エンツシュテヘン起しないとしても、斯かる普遍的なるものから成エンツシュテヘンり立つてゐると考へる。此の思

想は、實に、彼に固有なるものである。彼に従へば、また、實在と非實在との根本差別は、作用の能力と謂ふ事である。斯かる能力は、ただ實在にのみ、而して實在には恒に、存する所のものである。而して、實在は、たゞ意識の中のみ存し、意識の彼岸の存在はない、と考へる點に於いて、彼は、内在的哲學の繼承者でなければならぬ。偕て、若し哲學が、一の特殊學であるならば、その對象は、特殊なるもの(即ち、他の、特殊學の對象から、區別せられたるもの)である可きである。併し乍ら、哲學の對象は、所與一般の最普遍態でなければならぬ。夫れ故に、哲學は、基礎學としての哲學でなければならぬ。所與一般の最普遍態の學を、基礎學と呼ぶ所以は、これ以上の説明を要しないであらう。斯くて、哲學の任務は、所與一般の多様な最普遍態を、問題のなき明晰さにまで齎すことである。——フッサルの思想が、表現派の藝術論に迎へられた様に、レームケの思想もまた、一派の藝術家によつて採用せられつゝあるを見る。

第三項 組織學

— Ordnungstheorie

フッサルの現象學に、多少類似したものに、また、ハンス・ドリッシュ Hans Driesch (一八六七生)の組織學がある。夫れは、言葉の廣い意味での論理學である。哲學の、非形而上學的部分の體系である。彼に従へば、凡そ總ての事相の根本、即ち根本事相は、Ich habe, um mein Wissen wissend, bewusst Etwas と言ふ根本命題に於いて把握される。茲に、根本事相は、三つの要素から成る。即ち Ich, der um sein Wissen Wissende (認識の主體)と, habe bewusst (意識の作用)と, Etwas (對象)と。然し乍ら、此の三者は獨立ではない。根本命題は、三位一體である。而して、我が意識したる所の或物 Etwas は、組織せられたる或物 Geordnetes Etwas である。體驗せられたるものは、組織せられたるものである。ここからして、此の組織 Ordnung の本質を論究するものが、組織學である。(なほドリッシュに就いて

は、第五章に述べる。

第四項 其の他の論理主義

附、數理哲學

以上は、獨逸(若くは獨逸語の範圍)に於ける、現代に新たなる合理論的乃至論理主義的思潮であるが、夫れは、必ずしも、獨逸に限られてはゐない。現代の問題は、國際的である。此等の思潮と、假令、外的の直接關係はないとしても、明らかに內的の類縁を舉示する所の思潮が、特に英國に現れてゐる。例へば、ムーア G. H. Moore に依つて、プラトーン的の實在論が展開された。概念を以つて、單なる心的存在と考へず、概念の中に、物の本質そのものを見る。總ての認識は、唯だ、概念の上へのみ向けらるべきである。世界はすべて概念から成立する。存在とは、それ自身既に概念であると考へる。バートランド・ラッセル Bertrand Russell (一八七二生)の新實在論もまた、一種のプラトーン主義であつて、概念の客觀的理念

的性格の承認が、力強く表はれてゐる。彼もまた、意識作用と、其の内容とを厳密に區別して、普遍の世界を以つて、實在の世界と見る。普遍は物理的事實にも非ず、また心的存在でもない。それは、一般に存在するに非ずして、たゞ存立するものである。(彼はまた、最近、社界哲學の方面に出でて、社界主義的思想の宣傳に努めてゐる)。佛蘭西に於いては、理性主義の代表者は、ルイ・クーチュラ Louis Couturat (一八六八—一九一四)である。夫れは、新しい意味の、嚴密科學の哲學である。以上の如き、合理主義的乃至論理主義的思潮の、主要なる代表者たち、即ち、フッサル、ラッセル、グーテュラー等は、同時に、數理哲學の領土を開拓する上に、偉大な功績を残した。この他、數理哲學の傑れたる研究者としては、カントール Cantor (一八四五—一九一八)、ポアンカレ Henri Poincaré (一八五三—一九一

一ヘン・カッ シラー等を挙げなければならない。

そのほか、ガウス Karl Friedrich Gauss (一七七七—一八五五)、リーマン G. F. Bernhard Riemann (一八二六—一八六六)、ツェルナー K. Fr. Zöllner (一八三四—一八八二)、ヘルムホルツ H. v. Helmholtz (一八二一—一八九五)、エルドマン Benno Erdmann (一八五一—一九二二)、クローネッカー Leopold Kronecker (一八一三—一八九一)、グラースマン Hermann Grassmann (一八五七—一九二二)、ヒルベルト David Hilbert (一八六二生)、フレーゲ Gottlob Frege (一八四八生)、デデキント Dedekind、ブルンシュウィク Brunswick、シュミッツ、ドュモン Oskar Schmitz-Dumont、シートルツ Stolz、グマイナー Gmeiner、シュレーダー Ernst Schröder 等。

なほ、最後に、アルベルト・アインシュタイン Albert Einstein (一八七九生)の相対性理論は、全く新たな世界觀の改造を要求し、既に、カッ シラーは、其の認識論的

考察を與へてゐる。

第二節 反合理論的思潮。直觀主義

——Irrationalism, Intuitionism

現象學的思潮、其の他多くの論理主義の代表者たちが、嚴密なる理性的思惟の道程に於いて、哲學に、新なる基礎を置き得べき事を問し、斯くて、哲學が、數學の嚴密さを獲得すべき事を希求してゐる一方に——豐饒なる生命内實をば、餓え渴くが如く慕ふ一群の哲學者は、是れ等の哲學を以つて、餘りに形式主義に偏倚して、内容に於いて空虚なるものと觀じ、概念的思惟のみに恃む事の慊らざるを告白する。此の思潮を、一般に、反理性主義イラショナルイズム、若しくは直觀主義と呼ぶであらう。蓋し、其の主要なる思想は、思惟と並んで、なほ他に、學的認識の源泉があると言ふ考へである。既に思惟と並んで、知覺を以つて、眞の認識源泉と考へるならば、斯かる認識理論は、勿論、廣義の直觀主義若しくは直覺主義に屬するものである。蓋

し、生命は直接には経験、即ち知覺に於いて、具現すると考へられる。従つて、若しも、知覺とは同時に思惟であると考へようとも、それはまた、とりもなほさず、知覺は單なる思惟以上である事を承認するものでなければならぬ。併し乍ら、一般には、思惟並に通常の知覺機能以外に、尙ほ、他の能作が、認識の構成契機として主張せらるゝ場合に、是を反理主義と呼ぶ可きであらう。

獨逸に於いては、特にウイルヘルム・ディルタイ Wilhelm Dilthey (一八三三—

一九一三)並びに彼を中心とする其の學派の人々が、認識過程には、人間本質の全體、全體としての人間本質が關與する事を力説する。此の本質の全體態を等閑にして、思惟のみを孤立的に抽出する事は、全きものを破壊する所の、不當なる組立てなければならぬ。ロックやヒュームやカントの組み立てた、認識主觀の血管を流れるものは、現實の活ける血液ではない。否、それはたゞ單なる思惟作用としての理性の、薄められたる汁液にすぎない。温き、生けるがまゝの血液を

欲む此の思想が、歴史哲學の認識を、如何に論じたかは、既に(極めて不十分乍ら)吾人の一瞥した所である。更に、ディルタイは、此の根本の確信から出でて、殊に、外界の問題に關して、極めて具體的に、其の主張の開陳を試みる。外界實在性の確信の基礎は、感覺の原因への思惟的推論ではなくて、人間の意志経験である。吾が、若し、杖を以つて何物かを地上に推しつけるならば、吾々の意志行爲に於いて、そこに、世界の反抗に逢着するであらう。そして、此の意志への反抗を経験する事に於いて、吾々は、吾々から獨立なる實在を、確信するのであつて、吾々が、感覺から其の外的原因へと、思惟的に推論する事に依つて然るのではない。それ故に、外界實在性の把握は、此の反抗から其の外的原因への、推論の問題ではなくて、遙かに直接なる外的實在の確保である。

ディルタイの思想の反理主義は、なほ次の一面に於いて、殊に顯著である。即ち、抑も現實態(實在)そのものが、反理的、非合理的本性であると考へられる。彼に

とつては、實在は論理學原理の彼岸に立つてゐる。實在を貫くものは、二律背反である。此の二律背反、此の矛盾は嘗だに、然か現れるのみに非ずして、實にこれが現實なのであり、而して、夫れは如何なる思惟によつても、除去せられ得ないのである。されば、學的反省に依つて到達し得る所は、剩す所なき行爲の決定論である。それと同時に、行爲の全連鎖は、人格に於いて統合される。斯かる人格の能作に於ける、自發性と生命力。それに表象的の表現いひあらはしを與へるならば、それは、非定命論的の自由である。されば、茲には、決定觀と自由とが併存する。(前段、歴史科學の認識論中、ディルタイに關する部分参照)。

特に直觀哲學の傑れたる代表者を、吾々は、佛蘭西のアンリ・ベルグソン Henri Bergson (一八五九生)に見出す。彼の哲學は、自然主義の煉獄を経たる、現代の浪漫的唯心論である。汎生命論的新唯心論である。彼は、ブウトルウ Emile Boutroux (一八四一—一九二八)より出でて、自然科學的思惟をば超越する、形而上學を建設する。

其處には、因果的に規定せられたる「現象の自我」と並んで、直接なる直觀によつてのみ、把握せらる可き、體驗の自我がある。彼に従へば由來、對象の認識には、二つの方法がある。即ち、分析的方法と、直觀的方法である。前者は、科學の方法であつて、概念的に對象を把握せんと欲する。併し乍ら、概念的思惟の、遂に逢着せざる可からざる困難は、既にこれを昔のエレア學派が雄辯に物語つてゐる。概念的思惟は、對象に徹する能はず、恒に相對的たらざるを得ない。たとへ、夫れは、硬凝無生の、物質的對象に對しては、使用し得るとしても、生命に對しては、否、既に運動てふ事實の面前に於いては、全く無力たらざるを得ない。思惟は、遂に、實行上の應急策たるを出でない。若しも、空間的世界から獲得した範疇を、生命と心とに使用せんと試みるならば、其處に、生命と心とは、傷けられ、穢されるであらう。生命を把握するものは、他の方法、即ち、形而上學の方法たる、直觀に俟たなければならぬ。直觀(直覺)は、超理性的、睿知的の能力である。吾々は、直觀に由つて、對

象そのもの、生命そのものの中奥に参し、斯くて絶對を把握する。生命は流動である。世界は流動的存続である。人は、此の流動しつゝある所のものを、理解せんがためには、これを、内的に體驗しなければならぬ。自らの自我の裡に、人は、その流動を直接に體驗する。されば、世界の本質としての、流動的存続に導くものは、直觀である。概念的因果的なる、科學の分析が、空間的並存者の、靜的性質を事とするに反して、直觀は、動的生命的成生を討究せんとする。斯くて、直觀は物の本質に迫進するが故に、これこそ、形而上學の本來の方法である。彼れの形而上學は、生命の哲學である。生命とは、創造的進化である。實在は、生命の創造である。

斯様に茲に、ベルグソンもまた、吾人の思惟的概念の、遂に實在に到達せざる事を認める。されば、そこに、吾々は強くシエリングを思ひ出すであらう。さればとて、ベルグソンの思想の獨創性を、否定してはならない。(彼れの形而上學に就

いては(後段参照)。ベルグソンの思想は、理論としての明徹を缺くかも知れない。されど、彼れの天才的直觀と、傑れたる文章。彼れの思想は、今や世界の全土に及んでゐる。(第五章第二節第七項参照)。

米國のジェームス William James (一八四二——一九一〇)もまた、ベルグソンの影響のもとに、反理主義の道程を歩む。彼は、嘗ては解釋し得なかつた問題——例へば、吾人の個人的意識の上位に、是を包攝するが如き、より高い意識が、如何にして存在し得るかと言ふが如き——をも、此の道程に立つて解釋し得ると信ずる。且つ、ジェームスもまた、ベルグソンと共に一般に、吾人の概念は實在に到達し得ざる事、従つて、生命の完き姿を把握せんがためには、何よりも、生命そのものの中に、自らを潜在せしめなければならぬ、と言ふ事を信ずる。

但だ、ベルグソン流の反理主義は、獨逸に於いてのみは、著るしい影響を獲得してゐない。獨逸の學的精確を求むる心には、斯かる謂はゞ多少神秘的の解釋は、

直ちには受容せられ難い事情があるのである。

第五章 形而上學的乃至世界觀的思潮

第一節 古きより新しきへ

第一項 反形而上學的傾向

吾々は既に、現代哲學の初期に於ける、反形而上學的思想の廣汎なる事を語つた。實に十九世紀の第二半部に於ては、形而上學に對する嫌惡は、殆んど本能的なるものがあつた。そして、總ての哲學者は、多かれ少かれ、此の思潮の洗禮を拒む事は出来なかつた。現在にあつても、猶ほ、多くの論理主義者に於いて、形而上學の拒斥せられつゝあるものに、吾々は既に幾度びか逢着した。然るに、現象學的思潮が、一方に、哲學の新なる建設を期して、漸く思想界に重きを爲さんとした當時以來、他面に、特に獨逸哲學の中には、看過す可からざる轉向の機運が、動き初

めつゝあつた。即ち、形而上學に對する反感は、漸く退去しつゝあつたのである。

抑も、新カント派の大部分が、すべての形而上學を好まざるものである事は、既に、吾々の知悉する所である。彼等にとつては、カントは、特に形而上學一般の否定者であつた。就中、ひたすらに論理的思惟の透徹を要求するコーヘン Hermann Cohen (一八四二——一九一八)や、またリール Alois Rühl (一八四四生)等に於いては、時としては、憎惡にまでも強められたる拒斥のもとに、形而上學は、磨げられた様に見えた。(後段第二節第五項参照)。

此の間に於いて、新批判主義の群星の中にあつて、注目すべき恐らく唯一の例外は、ヨハンネス・ヴォルケルト Johannes Volkelt (一八四八生)のみであらう。勿論、彼もまた、カント主義者たらんとする者ではあるが、けれども、彼はまた同時に、ヘーゲルの偉大に培はれ、シウベンハウエルとハルトマン Eduard von Hartmann (一八四二——一九〇六)と、更にヒュームの影響のもとに育つた所の精神

である。さればこそ、彼は、理想主義的形而上學的精神と、懷疑論的批判主義的精神との結合を意圖して、一つの批判的形而上學を以つて、缺く可からざる哲學の課題と考へてゐる。

マッハ Ernst Mach (一八三八——一九一六)や、ツィーヘン Theodor Ziehen (一八六二生)の、新實證主義的思潮も、(わづかに、實用主義を例外として)、今日もなほ、多くは、形而上學を拒斥し、而かも、十九世紀末に然りしが如き、古い嫌忌の反情を以つて、これに對してゐる。其處では、彼等は、心的過程の事實性を認めて、これを以つて、また夫れに對應する精神現象存在の、權利根據たらしめんとするにも拘らず、一とたび、形而上學に對する時は、その包有する所の理念を以つて、單に主觀的なりと爲し、従つて、かゝる理念に關しては、如何なる形而上學的實存の權利をも、承認し得ないと考へる。リールの如きは、形而上學的世界觀を以つて、哲學者の主觀的心情に依倚するものと爲し、形而上學に「非學的」との刻印を與へて、哲學の

遂に形而上學たる可からざる事を主張する。

多くの哲學史的研究も、形而上學を包有するが如き過去の大組織體系を考察するに際しては、其の體系に内在する理性的契機によつて、これを把握する事よりも寧しろ、夫らの體系の建設者その人の、心全體からして、それを把握しようと努力する。その際、その體系組織そのものの理性的側面は、寧しろ背後に陥没して、建設者の心情性向そのものの上に重點が置かれるのである。此處に、歴史哲學者ディルタイ Wilhelm Dilthey (一八三三—一九一二)の批評がある。彼に従へば、歴史に現はれたる總ての體系は、其の思惟の出發點に従つて、三つの大きい類型に別つ事が出来る。(一)一群の哲學者は、感能知覺に於いて與へられる所の、外的世界から出發する。そして斯かる人々は、實證論的唯物論的體系に到達する。即ち、自然主義の立場である。茲では、心的生命は、物質的現象への比論に従つて考察される。此の立場にとつては、世界は、因果的に結ばれたる一全體であ

り、そこでは、唯、原因結果の關係のみが支配して居る。これに反して、總ての價值概念は、何ら客觀的の意義をも有つてはゐない。次に、(二)一群の哲學者は、世界に對する感情關係から出發する。彼等にとつては、世界は、より高き意味の表現と見える。世界は、茲に、內的の價值關係を獲得する。これが、客觀的理想主義の立場である。最後に、(三)意志の體驗を出發點とする人々は、自然に對する精神の自由と、並に、其の主權とを確信するに到る。これが、自由の理想主義の立場である。世界そのものを、人間の意志經驗への比論に従つて考察することは、やがて有神論へと導く。——ディルタイは、斯様に、哲學の(寧しろ生命の)三類型を區別したけれど、此等の中に、窮極の價值的の判定裁斷を與へることは、不可能である、と考へる。夫れ等の各々は、己れ自らに於いて有力であり、最早、他の原理に由つて證明する能はず、従つて、同等の權利を具有し、他者に由つて破らるる能はず、相互に並存する。蓋し、彼に従へば、實在そのものが、既に非合理的性格であり、體驗一般

を普遍的に概念する事は出来ない。各々の根柢は、生命そのものの中に、永續し活動し、斯くて新なる結構を産むのである。哲學の任務は、種々なる體系を、其の成起の相に於いて、理解する事に存す可きである。自ら世界觀を與ふる事の代りに、哲學は、世界觀の學とならなければならぬ。斯くして、彼は、反理主義的懷疑論を代表するものと謂ひ得るであらう。

〔エドゥアルド・シュプランゲル Eduard Spranger(一八八二生)は、此の思想を更に展開して、生活相の六大基本類型を區別する。即ち、理論的、經濟的、社會的、權力的、想像的、宗教的の六大基本性格に應じて、六つの文化目的がある。即ち、科學、經濟、社會、國家、藝術、宗教である。けれど、これ等は、抽象に於いては個別的であるが、全體的の文化連鎖に統合されるものである。〕

第二項 古い形而上學——一元論、汎神論

——Monismus und Pantheismus

斯かる機運のもなかに於いても、併しながら、吾々は、夙に、ヘッケル Ernst Haeckel(一八三四——一九一九)流の所謂モニスムス(一元論)の運動のあつた事を知つてゐる。夫れは、寧ろディレッタントの間にはあつたけれども、極めて廣汎なる運動となつて、大戰開始前に於ける、通俗形而上學たるの位置を形作つてゐた。

上述の如き、形而上學に對する原理的の反感にも拘らず、併し乍ら、他面に於いては、人々は、何等かの形而上學的要求から、全く離脱してある事を得なかつた。即ち、彼等は、自然主義の傾向を繼承して、大概は實證論的、唯物論的見解を奉じ、機械的世界觀を抱懷してゐた。而して、汎神論的解釋を以つて、これを補足して現れたものが、即ち、近代的一元論である。一元論の特質は、世界統一性の確信である。總てのものは、相互に類縁を有し、其の根柢に於いては、結局、一つの本質から出でたるものでなければならぬ。世界は、階和的に整へられたる、一全體で

ある。従つて、一元論の世界観は、結局樂天論的である。其の實踐論に於ては、總ての超越性を嫌惡し、拒斥して、現世的なる生命情調を、肯定するものでなければならぬ。茲に汎神論は、此の現世生命の肯定生命悅樂の思想に、携伴する事ができるのである。

勿論、此處に、一元論と總稱するものゝ中にも、非常に異別なる數多の傾向が存してゐる。ヘッケル流のモニスムスは、其の普及の比類なき廣汎さにも拘らず、遂に、ディレクタントの哲學たるを脱し得ない。夫れは、根本に於いて、獨斷的であり、結局唯物論である。而かも、古代希臘の半ば神話的なる自然哲學と、どれ丈け嚴密に區別する事が出来るであらう。これに對して、より重要ないま一つの思潮は、唯心論的一元論 *Spiritualistischer Monismus* である。此の思潮の本來の源流は、確かに、之をヴァント *Wilhelm Wundt* (一八三二——一九二〇) に求む可きものであらう。そして更に、フリードリッヒ・パウルゼン *Friedrich Paulsen* (一八四

六——一九〇八)が、其處に、より廣い道程を開いた。其の理解に従へば、實在は、結局心的なるものから成立する。物理的なるものと雖も、要するに、心的なるもの顯現にすぎない。けれど、此の心的なるものそれ自身は、其の根柢に於いては、純粹意志である(意志一元論 *Voluntaristischer Monismus*)。併し乍ら茲では、何らかの精神實體は拒斥されて、心的なるものそれ自身は、全く、純粹の過程から成立すると考へられる。過程そのものである。而して、此の過程は、意識の統一となつて綜合される。斯様に、世界はすべて、唯心論的に理解せらるゝが故に、物理世界の體系のある所、其處には、其の反面は直ちに心的世界の統一である。物的宇宙に對應して、世界精神が立つ。従つて、物と心との關係は、並行論の意味に於いて規定される。物的過程のある所、必ず心的現象がこれに對應する。寧ろ、物的過程は、心的過程の顯現にすぎない。されば、其の根本思想に於いて、唯心論的一元論は、また、遂に自然主義の産物である。蓋し、其の理論の動因を爲すものは、機

機械論である。其の理論の根柢に存するものは機械論的原理が普遍的に妥當するといふ確信である、と謂はざるを得ない。

けれども此の種の一元論は、一面に於いて、純粹の學たるよりも、寧ろ、宗教的情調を以つて彩らるるに適してゐる。既にパウルゼンは善と善の勝利の信仰が、學そのものに於いて、純粹學的に承認されなければならぬと考へる。此の意味に於いては、すべての實踐哲學は、また宗教的でなければならぬ。斯くて、此の一元論は、意識的に、デホルダノブルウノの汎神論に、近接したと謂ふ事が出来る。ヘッケルの一元論が、それ自ら、殆ど一の宗教運動たらんとさへもした事は、周知の事實である。

佛蘭西に於いては一元論は、進化論者なるアルフレッド・フッイヒ Alfred Fouillée (一八三八——一九一二)及び彼の繼子ジュアン・マリイ・ギョウ Jean Marie Guyau (一八五四——一八八八)によつて、代表される。彼等の一元論は理想主義

的である。前者は、ヴァントに似て、意志論的の唯心論を説く。且つ、理念は、單なる空想虚構に非ずして、能作的の契機である——理念は力であると観て、此の力としての理念の進化論を説く。宇宙は、精神的諸力の一全體であり、力の最奥の根柢は、神性であると謂ふ。ギョウは、情熱の人である。憂鬱にして大膽なる、詩人的哲學者である。彼は、生命本能を力説し、冒険と戦ひとを悦ぶ。彼は、多くの點に於いて、佛蘭西のニイチエである。

アングロサクソンの世界は、思想に於いても、保守的安定を喜ぶ世界である。永い間一神論的の有神論、乃至二元論的の有神論が、大部分において支配してゐた。英米の思想は、汎神論的一元論を容るゝに速かではなかつた。けれども、最近二十年以來、其處でもまた事情は變つた。既に、ハッチソン・スターリング J. Hutchison Stirling (一八一〇——一九〇九)、エドワード・ケヤード Edward Caird (一八三五——一九〇八)、特に、トーマス・ヒル・グリーン Thomas Hill Green (一八三六——

一八八二の絶對的唯心論 Absolute Idealism は、カント並びにヘーゲルの精神より出で、其處に、英國思想独自の展開を喚び起した。彼等の思想が、未だ汎神論的ではなかつたとしても、而かも、彼等に由つて開かれた道程は、これを容るゝの可能性を準備したものでなければならぬ。英國のフランシス・ハーバート・ブラッドレー Francis Herbert Bradley (一八四六生) 米國のジョサイア・ロイス Josiah Royce (一八五四—一九一六) は、此の道程から生れたる一元論的理想主義の代表者である。これらの一元論は、近代獨逸の汎神論よりも、寧しろ、より多く、フィヒテ、ヘーゲル流の哲學を思はせるものがある。其處には、絶對と言ふ言葉が固執される。ここに絶對とは、あらゆる個別的意識を包括するところの、統一的全包括的意識(若しくは經驗)として理解される。

なほ、獨逸系の米國人パウルクレーラス Paul Cairns (一八五二—一九一九) は、宗教と科學の結合を圖り、實證論的の一元論を取つて、統一的世界觀の普及に努め

てゐる。雜誌 The Monist 並に The Open Court は、其の機關紙である。けれども、彼れの頭腦と關心とは、徒らに廣くして淺し。

汎神論の一元論は、一般に、斯くの如くに、普及せられ、通俗化せられ、廣汎なる影響を與へたとは、雖も、所詮、舊き形而上學たらざるを得ない。勿論、今も尙ほ、有力なる主張者を挙げ得ないのではないけれども、學的嚴密さを要求する事の盛なる現代に、最早、夫れは、決定的の形而上學たるの位置を、占める事は出來ない。其の最も有勢なりし時代に於いて、さへも、夫れは、決して支配的ではなかつたのである。特に、獨逸に於いて然りである。例へば、ヴントは、多くの點に於いて汎神論に近づき、其の意志論的唯心論の一元論の建設に於いて、汎神論のために道を開いたとは、雖も、而かも、最後の言葉に於いて、彼は恒に之を拒む。彼に従へば、世界の根柢は、一般にたゞ要請せられ得るのみであつて、其の實相を知識する事は出來ない。寧しろ、それは、實踐倫理的理想の上に於いて、想定し得るにすぎない。

と考へられてゐる。更に進んで、現代の新しい形而上學、例へば、オイケン、フォルケルト、キユルペ、またリーブマン、Otto Liebmann（一八四〇——一九一二）等の形而上學は、寧ろ、此の「古い」形而上學から距れて、それぞれ新たな自己の道程を歩むものである。

第二節 新たな形而上學

思惟は、自らの本性を明らかにしなければならぬ。實在の意味は、知識せらる可きである。生命は、其の本質に於いて、把握されなければならぬ。哲學的要求のある所、其處には、所詮、形而上學への向求は、培はれてゐる。斯くして長い間、表面下に準備されてゐたものは、今や、大なる力を以つて、新しい形而上學と爲つて現れて來た。而かも、其の出産を促進したものは、また、生命そのものの覺醒でなければならぬ。

自然科學的機械觀の、遂に保持す可からざる所以をば、既に、科學そのものが自ら告白する。上述の、古い一元論的世界觀の合言葉、世界の機械論的性格は、物理學的研究自らに由つて、其の根柢を危くされた。永い間、世界の普遍的法則として、尊ばれてゐた、機械論的原則は、今や、無機的自然に於いてさへも、唯だ制限され

た範圍に於いてのみ妥當するものと爲される。生命そのものは、尙ほ、より眞實の相に於いて、掴まられる事を要求する。而かも、徒らに古い昔の浪漫的生命觀なる復歸ではなくて、自然主義の煉獄を経て、一とたび自らを焼き盡して、再び新への、單たに生れたる若きフェニックスに應はしき、新たなる世界觀の根帯が見出されなければならぬ。

斯くて、古い一元論に代つて、新しい二元論が、若しくは寧しろ多元論が、思想の主潮に現れて來る。汎神論に代つて、再び有神論が支配せんとする。新しい意味での浪漫的理想主義が、世界觀の綜合を企圖して起つ。生命の意味、文化の意義が、清新なる血潮と、崇高なる理想の下に、討究されなければならぬ。

第一項 生物學的形而上學——新生活論

—Neovitalismus

上述の如き新氣運は、生命機械觀に對する一面の反動であつた。従つて、其處

には、生命をば、物理的自然への比論に於いて考察する代りに、生命を生命として、如實に把握せんとする根本の要求が脈搏つてゐる。新形而上學的確信の構成に對する、直接の示唆が生命若しくは有機態を直接對象とする個別學から、與へられた事は、最も理解し易き事實である。即ち、既に長い間、此の機會は特に生物學の裡に培はれて來た。嘗ては、ダーウィンの進化論が、自然主義時代の神殿であつた。時代は、翁然として、其の前にひさまづき、人々は、淘汰進化の原理を以つて、無上の神法と奉じて、有機態と無機態寧しろ單なる無機的聚合との區別をば、事もなげに無視し了つた。有機態と雖もまた、非有機的の構成體から、決して、原理的に區別せらるべきものではないと考へられてゐた。けれども、時は過ぎて行つた。何時までも、生命は、己れ自らの侮蔑に甘んじてはゐない。有機態に固有なる法則性の確信が、再び、生物學そのものの司配者たるの期が、來なければならなかつた。有機態の、自律的目的的結構は、機械的偶然性の上に、還元される事

は出來ない。斯くて、有機態の存在事實その事が第一に、新なる形而上學的の確信への動因を與へるものとなる。そして、今や、有機的世界を産み出す所の根本契機が、要請され假定されなければならない。そして、彼等の本性、彼等の能力が、固有の姿において、闡明されなければならない。斯くして、茲に生れたる者は、^{ネオ}新活主義である。それは、有機世界の爲に、特殊の生活力を絶対必然として假定し、既知なるもの、即ち、内界より出發して、未知なるもの、即ち、外界の説明へと向ふ。

此の種の生物學的形而上學の高頂に、植物學者より出でたるヨハンネス・ラインケ Johannes Reinke (一八四九生)と、動物學より出で、哲學に來たれるハンス・ドリーシヒ Hans Driesch (一八六七生)の、新生活主義がある。

ラインケは、有神論の上に立つ。原初の有機態は、神の直接の創造であつた。けれど、この神、即ち創造的容知の源泉から、有機態の發展を制約すべき、目的意識的の容知的有機的勢力——寧しろ、その勢力の方向を指導する力——が生れてゐる。

それ故に、一と度び神によつて創造せられたる有機態の、爾後の展開は、最早直接神の干涉なしに、此の有目的、有機的勢力に依つて制約されてゐる。此の勢力は、勿論、自ら無機的物質にも作用するが、けれどそれは、無機的世界を司配する所の、機械的勢力の方向のみ、動かすものである。それ故に、有機的勢力の假定は、所謂^{エネルギー}勢力恒存の法則との背馳には陥らない。ラインケの思想は、古い考へ方の「生活力」を、一層精確なる概念に齎してはゐるけれども、尙ほ多くの點に於いて、^{ディレクタント}の印象を與へずにはおかない。

ラインケよりも、論理的に遙かに鋭く、また年代上彼よりも早く、ドリーシヒが新生活主義を基礎づけてゐる。彼の思惟は、屢々スコラ的てふ非難を招來した程に、何よりも精緻ならん事を期してゐる。彼は、一の特殊なる生物的自然動力有機的勢力を假定して、これを獨自能動的なるエンテレヒー Entelechie と呼ぶ。

此の際、其の名前に於いてのみならず、また、其の内容に於ても、アリストテレース

の理念を想起させる。エンテレヒーは、空間中に於いて働くけれども、それ自らは、非空間的、非物質的性質である。さればとて、また、それ自身心的性質でもない。併し乍ら、其の働きは、唯だ、人間の目的行動への比論に従つてのみ、理解さる可きである。それ故に、ドリーシユは、またこれを Psychoid と呼ぶ。精神生命そのものは、此のプシコイドの流出に外ならない。有機態の固有の本質を、概念的に闡明する事が、ドリーシユの企畫である。それ故に、彼は何よりも、有機態を一の機械と見做す所の、機械説をば力強く打破せんとする。有機態は、機械よりも遙かに、より以上である。蓋し機械は、到底、他の自己と等しき者を生産し能はず、また例へば、再生能力の如き、有機態固有の性質を有つことは出来ない。ドリーシユもまた勢力恒存の法則と背馳する事を避けようとしてゐる。——ベツハー (Erich Becher) 一八八二生) や、エステルライヒ T. K. Oesterreich (一八八〇生) は、最早、このことを問題としてゐない。——ドリーシユはまた、最高、世界エンテレヒーの

思想にも近寄つて行く。

尙ほ此の他に、より若い生活主義者の一群が、フランセ Raoul H. Francé (一八七四生) を中心として集まつてゐる。アドルフ・ワグナー Adolf Wagner (一八三五——?) は、新ラマルク主義若しくは心的生活主義^{Psychophysikalismus}を唱へる。そのほか、ユークスキュール J. von Daxhill、ウィースナー Jul. von Wiesner、ヘルトウイヒ Oskar Hertwig (一八四九生)、ベツハー Erich Becher (一八八二生) 等も、新生活主義に傾いてゐる。なほ、既に、エドゥアルド・フォン・ハルトマン Eduard von Hartmann (一八四二——九〇六) の形而上學も、本質に於いて、新生活主義の學說に類似してゐる事も、注目に値ひする。

第二項 心理學からの形而上學

心理學に於ける思潮の變移は、また形而上の現狀に、直接の影響を及ぼした。(前段心理學の項参照)。例へば、従來、心的現象をば、能ふ限り、物的現象への比論に

於いて解釋せんとした傾向の代りに、兩者の本質的差別を洞察し、寧しろ其の差別に、重點を置かんとする傾向が現はれて來た。就中所謂、心のない心理學を離脱して、特殊なる「自我」の假定を認容した事は、形而上學にとつて、特に、意味ある事柄でなければならぬ。更に、精神物理的並行論を放棄した結果は、新たな意味での、心物相互作用論へと移行して行つた。此の間に於いて、意志自由の問題が、色々と論ぜられたことも、茲に注目し値ひする。即ち、マックス・ウエンチェル Max W. ntscher (一八六二生)、ヘルマン・シュワルツ Hermann Schwarz (一八六四生)、カルル・ヨエル Karl Joel (一八六四生)、エステルライヒ T. K. Oesterreich (一八八〇生)、マンノ R. Manno 等は、心理學的研究の方面から出でて、再び自由をば承認した。ナルツイス・アッハ N. riss Ach (一八七〇生)は、實驗心理學によつて、これを證明しようとするさへも試みてゐる。

第三項 精神科學からの形而上學

新しい形而上學の、より廣い流れが、歴史的、精神科學の方面から現れて來た。其處では、何らかの形而上學的基礎を、假定する事に由つて、現實態の因果關係を、遺漏なく、闡明し盡す事が、主要の問題ではなくして、寧しろ、ある意味關係を、現實態のうちに設定する事が問題なのである。約言すれば、現實の意味を明らかにする事を任務とする。そして、此の任務を果すがためには、何らかの形而上學的假定が、必然的に要求されるのである。

斯かる動機、斯かる要求よりの形而上學を建設して、現代に最も廣汎有力なる——遙かに國境をこえて——影響を獲得した一人は、即ちルドルフ・オイケン Rud If Eucken (一八四六生)である。彼の形而上學は、全く反一元論的であり、寧しろ、二元論的性質である。而して、其の形而上學の確信は、嚴密に證明に堪え得るものとして、最初からあるのではなくて、寧しろ、上述の要求より生れたる一の必然的なる假定である。オイケンは、獨逸理想主義、殊にフイヒテの哲學の影響の

もとにあつて後者との明らかなる思想的血縁を有つてゐる。由來現實には意味がある」と謂ふ事は、獨逸理想主義の根柢に存する、基本的確信である。オイケンもまた彼の形而上學の先頭に、此の證明し得られざる、寧しろ證明を超越する所の命題を置く。そして彼の形而上學は如何なる前提のもとに於いて、世界は斯かる高い意味を有するかを示さうと欲する。此處から出でて、彼の形而上學は、必然に精神生活の哲學である。世界には唯だに經驗的なる人間の群があるのみではなくて、否更に、より高い超個人的の精神生活がある。各個人は、此の高貴なる精神生活に參與する若しくは、尠くとも參與する事が出来る。若しも、かの生物學的考察が屢々假定した様に、利己幸福的なる個人の精神世界のみが存在であるならば、世界は結局無意味であらう。斯かるものの上に超えて、より高い精神世界の存立は、絶對の要求たらずんば止まない。併し乍ら、人々は、無爲にしておのづから、此の高貴なる精神界に參與するものではない。彼は、自らの努

力に由つて、此の參與を克ち得なければならぬ。彼が、その自然的自己中心觀を、原理的に打破する時にのみ、彼にはそれが許される。唯だ、より深い内的精神轉向のみが、此の歡喜を願つであらう。己れ自らの「行」によつてのみ、本質への騰揚は果されるであらう。而かも、斯かる精神生活は、決して單に道德的乃至宗教的範圍にのみ限られはしない。個體が自らを超えて、騰揚せんとする所には、すべて——學的活動にも、藝術的活動にも、其の活動が眞實である限り——此の高貴なる精神界への參與が行はれる。オイケンの倦む事なき勞作は、斯くて、人生の精神的、生活内容及び其の宗教的生活根柢を擧示して、時代を、外的文化の陶酔的沈淪より呼び醒さうとする。彼は、自捨的情熱を以つて、改革者の力を以つて——學的によりも、寧しろ宗教的に、此の根本思想を提げて時代に臨む。蓋し、超越世界の確信は、宗教である。是を以つて、彼れ思想は、一元論的、汎神論的の形而上學よりも、基督教に對して、より近く立つものである。けれど、勿論彼は、自然

を神格化するものでもなければ、人間を然かするものでもない。寧ろ彼れの形而上學には、強く二元的で、而して超越の世界に法悦を獲んとする、神祕主義的な響きがある。従つて、彼は、傳統的神學的の成立宗教たる現代の基督教と、全く一致するものでもない。

宗教哲學の上で開拓したエルンスト・トレルチ Ernst Troeltsch (一八六五—一九二三)の思想も、オイケンの確信に近いものがある。彼は、認識理論に於いては新カント派、特にバーデン學派の思想から出でて、新形而上學の立論に到した。(吾々の既に見て来た様に、獨逸新批判主義思潮の中で、バーデン學派に於いては形而上學への反對は、他の諸派に於いてよりは、いくらか尠いのであつた。尙ほ後段第五項参照)。彼もまた、認識、倫理、美の世界に於けると同様に、宗教の世界にもまた、先驗的理性原理のある可き事を認める。もとより、經驗的現實の中ではそれは、純粹事實的なるもの、非合理的なるものと混在するけれども、それが理性

的必然的である限り、宗教の世界に對しても構成的に作用する。宗數哲學は、此の先驗性を規定すべきである。トレルチは、また力強く、世界の機械的性格を否定する。精神世界は、自然科学的の因果性に從屬すべきではない。内的體驗の上こそ宗教は立つ。そこには、神の經驗的體驗さへもがある。宗教性の核心は、此の神祕なる經驗の裡にある。

神は、何らかの仕方直接の經驗に應ずるか、如何にして然るか等の、宗教上の認識問題を、またエステルライヒ T. K. Osterreich (一八八〇生)が取扱つてゐる。(これは、彼れの、注目すべき宗教心理學の研究に關係する)。

第四項 新しい有神論

— Theismus

以上の如き傾向はまた古い汎神論を捨てて、新しい有神論^{テイスマムス}への移行を、指し示すものでなければならぬ。哲學の種々異別なる諸分野から、有神論的思想が

再び現れて來て、徐ろに獨逸形而上學界に重きをなさんとする。心理學より出でて、既にオスワルド・キユルベ Oswald Külpe (一八六二—一九一六)は單子論的な有神論的形而上學を建設した。彼れの哲學は、二元論的にして、同時に有神論的の立場を取る。即ち、物體的實在と、精神的實在との本質的差別を認め、更に、世界の目的性と云ふ論據に立つて、世界精神としての神を證明する。美學研究の泰斗ヨハンネス・フォルケルト Johannes Volkelt (一八四八生)の批判的形而上學も、其の根柢に於いて、有神論を抱懐する。其處には明らかに、十九世紀中葉後の所謂有神論學派——イムマヌエル・フィヒテ Immanuel Hermann Fichte (一七九七—一八七九)、ヘルマン・ウルリッツイ Hermann Ulrich (一八〇六—一八八四)、フリードリッヒ・ハルムス Friedrich Harms (一八一九—一八八〇)等——の重鎮にして、近代の大形而上學者ロッツェ Rudolf Hermann Lotze (一八一七—一八八一)と有神論の代表者、ザイデル Rudolf Seydel (一八三五—一八九二)との上に、看過すべからざる

影響を遺したるクリスチャン・ヘルマン・ワイセ Christian Hermann Weisse (一八〇一—一八六六)の思辨的有神論を思はせるものがある。ヘルマン・シューワルト Hermann Schwarz (一八六四生)も亦、此の思辨的有神論の影響を受けてゐる。更に、加特力神學より出でたるブレンタノ Franz Brentano (一八三八—一九一七)従つて、彼れの思想を繼ぐ現象學一派が、有神論的思想を擁護することは、容易に理解し得るであらう。フッサル Edmund Husserl (一八五九生)に於いては、有神論的思考は、學的に捨つ可からざる理念である。ブレンタノの心理學を展開しつつあるエーレンフェルス Christian Freiherr von Ehrenfels (一八五九生)も、有神論を保持する。フッサル一派に屬するマックス・シェラー Max Scheler (一八七一—一九一七)も、有神論的假定を認めて、新スコラ主義に傾く。斯様にして、有神論の問題は、漸やく、宗教哲學上の主要問題たらんとしつゝ、あると言ふことが出来るであらう。

形而上學に於ける現代の趨勢は、一面に於いて、かのロッツエの目的論的理想主義を高潮とする十九世紀中葉の主潮に、近似するものであると謂ひ得るであらう。只だ、現代の有神論は、過去の夫れに比して、より徹底的、より非獨斷的たらんと努めてゐる。例へば、特に神と世界との關係、世界は神の創造であるか否か、若しくは獨自の本質として神と並立するか否か、等の問題が、殊更に考察の對象となる。そして、それは、即ち神義論 Theodicee の問題と提携する。而して再びこの問題が熱心に論ぜられてゐる。例へば、エーレンフェルスは、世界の經驗的性格を根柢として、超驗的の二元論に赴く。ドリーシュやエステルライヒも、同じ問題を屢々論じてゐる。

第五項 形而上學の奔流

新しい形而上學の波は、斯くの如くに廣汎である。其の水源は深く、従つて其の水勢は強い。嘗ては嫌惡を以つて是れに對してゐた人々も、今や此の時代の

意味深き流れに洗はれてゆく。「あらゆる形而上學の否定者」カントの眞精神を奉持して、認識理論の論理的徹底を事とする、新カント學派の上にさへも、反動の波は寄せて行く。

吾々は先づ、ヴィンデルバント Wilhelm Windelband (一八四八—一九一五)に於いて、形而上學的理念の要求を見出し得たであらう。彼れの認識理論は、力強くも超驗的なる物自體の概念を拒斥する。而かも、其の宗教哲學に於いては、聖の本質の謂はゞ超驗的存在の要請にまで高まつてゐる。蓋し、聖は絶対眞、絶対善、並に絶対美の價值から成る。されば、この絶対規範は、たゞに、當爲の形式に於いて存立す可きのみならず、また、超驗的世界の中にも、尙ほ一の存在を保つ可きであらう。リッケルト Heinrich Rickert (一八六三生)の認むる所の、知識以前の世界とは、抑も、何を語るものであらうか。

更に、マールブルヒ學派の態度は、既に述べたるが如く、形而上學に對しては、一

層慎重なるものがあつたにも拘らず、宗教の概念に關する、最後の勞作に於ける
 コーヘン Hermann Cohen (一八四二—一九一八)は、以前よりも遙かに多く、形而上
 學と融和の機會を示してゐる。ナトルプ Paul Natrup (一八五四生)が、總ての認
 識以前に、直接體驗の世界を置くならば、それは(有意識的ではないかも知れない
 が)形而上學的契機を、問題とするものでなければならぬ。彼に於いては、實に、
 認識の世界と、體驗の世界との結合が、重大なる問題とならなければならぬ。
 其處には、非常に強くベルグソンの思想を思はせるものがある。ナトルプの後
 繼者たるべきニコライ・ハルトマン Nicolai Hartmann (一八八二生)は、進んで、認識
 の形而上學を説いて、寧しろ、現象學への接近を示してゐる。ジューメル Georg Si-
 innel (一八五八—一九一八)も、認識理論に於いては、マールブルヒ學派と、遠く
 絶するものではないにも拘らず、其の晩年の展開に於いては、形而上學的理念の
 豊富なるを否定する事は出来ない。

更に、實證主義的思潮の内部にも、形而上學的思想に迎合せんとする努力があ
 る。——一方に、フアイヒンガー Hans Vaihinger (一八五二生)は、形而上學的思考
 の自由を要求する。また、エリッヒ・アディッケス Erich Adickes (一八六六生)は、學
 的形而上學を以つて、不可能であると思惟し、世界觀とは、主觀的の信仰確信にす
 ぎないと考へるが、けれど、斯かるもの(信仰)としての、形而上學の價値をば認めて
 ゐるのである。

第六項 世界觀の綜合——文化哲學と内容的の歴史哲學

—— Philosophie der Kultur und
 Inhaltliche Geschichtsphilosophie

形而上學の確立は、やがて、世界觀の成立を産む。現代の改造せられつゝある
 形而上學的確信の展開と關聯して、綜合的世界觀の學的樹立への關心が動く。
 世界觀の統一は、また、現代の主要なる思潮である。世界は、生命は、その内容に於
 いて、その統一態に於いて、把握せらる可きを欲む。哲學は、己れ自らの全的任務

を意識しなければならぬ。哲學をば、認識理論の形式主義の上にのみ制限する事は、生命内容に憧れる人々の、全的關心を要求することは出来ない。生命の内實。内實に充ち溢れたる思惟。その要求は、總ての方面に目醒めて來る。例へば、自然科學の認識論に對しては、新しい内容的の自然哲學が、再び建設されようとする。——即ち、オストワルド Wilhelm Ostwald (一八五三生) ユーハー Erich Recler (一八八二生) 等。(各其の項参照)。——また一方には、物質的並びに精神的世界をば、綜合的の世界形象に統一して、現代の要求に應はしい世界觀を、建設すべき試みが企てられてゐる。——即ち、エステルライヒ F. K. Oesterreich (一八八〇生) ロッペルマン Wilhelm Kopp Imman (一八六〇生) 等。

けれど、就中、注目す可きものは、文化哲學である。文化を哲學の對象とする努力は、何處よりも先づ、ヘーゲルに於いて偉大であつた。今や、哲學の綜合的、全的任務に對する意識の高まると共に、浪漫主義の精神は、再び喚び醒された。けれ

ども、新しい浪漫主義は、自然主義實證主義の煉獄を経て、その徹底から、更に生れたる理想主義である。新しい生命の搏動に蘇つた第二部のフアウストである。古い浪漫主義は、人間理解の堅琴を取つて、崇高莊大なる小宇宙ミクロコスモスの歌を奏でんとする抒情詩人であつた。新しい浪漫主義は、意味實現に溢れたる文化の舞臺に、人格價値の客觀性を握まんとする、眞摯なる戯曲詩人である。此の精神に於いて、今や、文化は再び哲學的考察の對象となり、其の意味は問はれ、其の價値は尋ねられる。吾人の文化に現存する價値は、抑も何であらうか？ 文化の理想は何處に？ かくて、先づ、現代の文化哲學は、其の關心の中心に、文化價値の問題を掲げる。

文化價値の闡明は、價値體系の確立に俟つ。かくて、一般的なる價値理論は、いまや哲學にとつて、ひたすら欲しましきものでなければならぬ。價値に對する意識は、既に長く、哲學的考察の底に動く潛勢力であつた。斯くて今や、例へば

美學に於いても倫理學に於いても實證論的の相對主義は、夙に征服せられんとしてゐる。新カント學派は、其の全潮流に於いて、此の任務に對する意識に覺醒したるものである。ブレンタノ Franz Brentano (一八三八—一九一七)は、現代哲學の初頭において、既に實證論的相對主義的思潮に對して、結實豊かなる戰を開始した。現象學が同じ方向に動いて行く事は、明らかである。牢固たる傳統を奉持して、たやすく揺ぐ可くも見えなかつた英國の功利主義さへも、モリアー G. H. Moore、ラッセル Bertrand Russell 等の論理主義の銳鋒の前に、漸やく動かんとしてゐる。——就中、ウィンドルバント Wilhelm Windelband (一八四八—一九一五)は、價値の學たる事を以つて、哲學の本質とさへも考へようと欲む。總ての實證科學が事實を對象とするに反して、哲學は、規範を與へるものでなければならぬ。哲學は、事實的價値評價の間に立つて、何が眞個に眞であり、善であり、美であるか——何が眞に其の反對であるか——の決定を與へるものでなければならぬ。

ない。けれど、彼れの事業は、問題の展開に於いてよりも、課題を與へたる事に於て偉大であつた。乃ち、ミュンステルベルヒ Hugo Münsterberg (一八六三—一九一六)特にリッケルト Heinrich Rickert (一八六三生)が、價値體系の展開を試みる。リッケルトに於いては、普遍妥當的價値の體系は、文化に於いて求められる。(前段、其の項参照)更に、文化の全體を、夫れに應ずる哲學的意識にまで、高めんとする試みは、より若い人々によつて企てられる。即ち、ヨナス・コーン Jonas Cohn (一八六九生)は、價値理論並びに文化哲學において、リッケルトの影響より出で、現代文化の意義を探求し、文化の向上を任とすべき教育の精神を説く。大戰の犠牲者エミール・ハムマツヘル Emil Hammacher (一八八五—一九一六)は、ヘーゲルの哲學より出でて、文化批判の準據を考究し、進んで現代の文化を批評する。

嚴密なる學的方法に據つてではないが、けれど、天才の洞察を以つて、前世紀の七八十年代に、既にニイチエ Friedrich Wilhelm Nietzsche (一八四四—一九〇〇)が

鋭い文化批評の範を示してゐる。かくて、現代哲學に對しても、なほ彼は生ける酸酵素である。彼は哲學に、全文化の女教師たる可き、崇高なる任務を課した。而かも、彼は論理的基礎の細緻を事とする學究としてよりも、むしろ時代を率ゐんとする豫言者、否な命令者として、時代の醜惡なる缺陷に對する反抗の情熱にもえて、價値の轉換を叫ぶ。新たなる價値は、あらゆる歴史的傳統を否定する自由と、同時に、至高なる價値生活の類型、即ち超人を創造する藝術家(創造者)によつて、甬めて將來される。超人は、大地の意味である。茲に、個人肯定の哲學がある。されば、彼の憎惡の向ふ所は、就中、基督教と社會主義とでなければならぬ。兩者を支配するものは、個性價値の確信ではない。兩者の世界に於いて、行爲の標準乃至目標と爲さるるものは、傳統の腐屑を負ふ、無價値に近き弱輩の群集である。彼にとつては、基督教は、古代文化の否定者として現れ、漸やく傳統的組織に硬化し了りたる、生命偉力の侮辱者である。無抵抗的乃至平等觀的の社會主

義は、現代における其の直接の後繼者である。彼等は、精神的生命實在の、絶大な價値を知らない。愛他主義の理想と個性の放棄。夫れは強者の價値を否定しようとする。けれど同情は、弱者への下降であり、力の墮落である。基督教は、弱者の宗教、奴隸の慰安である。これに全く反對に、ニイチエの要求する所は、貴族主義的古典的なる、權力者の理想への復歸である。彼は、實に、善惡の彼岸に立つ。權力意志の人！ 詩人哲學者ニイチエの思想には、殆ど直接に、以上の思想と並んで、彼をして、獨逸古典主義の文化理想の、後繼者たらしめる所の思想がある。即ち、彼は、最後の反政治的なる獨逸人として、政治生活をば全く輕侮して、民族生活に於ける唯一の價値あるものは、實に精神的文化であることを力説する。此の思想は、彼れの武歩を推し進めて、文化的世界主義へと導く。彼れの思想の此の側面は、今日まで、不當に看過されてゐる。けれど現代は、此の光華ある思想の故に一層彼を仰ぎ見るであらう。

文化哲學の高頂に、茲に内容的なる歴史哲學を一瞥しなければならぬ。即ち、歴史的展開の全的道程を問ふ所のものであるが、斯かる任務には、個別學的歴史研究の堪え得るところではない。愈々細目的研究に分岐し、従つて、其の視野の益々制限せらるゝが如き歴史研究の態度は、尠くとも、文化價値の體系としての歴史の、全的過程に答へる事は出來ない。而かも、斯かる價値の定立のためには、一面に、歴史の認識論が要求されなければならぬ。現代の歴史哲學の大部分が、なほ其の認識論に留まる事は、既に吾々の知つてゐる所である。哲學は、未だ精神歴史科學の全野に於いて、其の全的任務を完全に満たす事は出來てゐないと謂ひ得るであらう。

偕て、歴史の世界には、其處に完全なる綜合を果す可く、あまりに夥多なる材料の豐溢がある。けれども、眞に創造的なる精神は、なほ斯かる豐溢の前にもたち

ろぎはしない。即ち、歴史的素材の全蒐塊を、精神的に支配せんとする最も意味ある試みが、既にヤコブ・ブルクハルト Jakob Burckhardt (一八一八—一八九七)によつて企てられた。彼は、一般に歴史哲學に對して反對するにも拘らず、而も尙ほ、彼れの『世界歴史的考察』は、ヘーゲル以來の最も意味深い歴史哲學である。即ち、彼はそこに、歴史的、生活の三大力場、國家、宗教、文化の相互關係に關する普遍的法則の展開を試みてゐる。ドイツ人 Wilhelm Dilthey (一八三三—一九一〇)並びに、彼れの學派と見らるべき人々——エドゥアルド・シュランゲル Eduard Spranger (一八八二生)、ヘルマン・ノール Hermann Nohl (一八七九生)、フリッツ・アイゼンケラー Max Frischeisen-Köhler (一八七八生等)——の、歴史の評價關係と、其の意味とに關する勞作も、また、單なる認識論以上のものを包有してゐる。(第五章第一節第一項を参照)。

カルル・ラムプレヒト Karl Lamprecht (一八五六—一九一五)は、ランケ L. v. Ran-

一七九五—一八八六)一派に反對して、歴史學の意味と方法とに關して、新たな道程を開拓した。歴史學は、自然科學を範として、各民族の發達に等しく妥當すべき、自然法則を發見すべきである。而して、其の對象は、政治的生活に非ずして、文化生活でなければならぬ。かくて、彼は、總ての民族の文化發達の、普遍的類型的形式を擧示すべく試みる。斯かる形式は、零細なる文化の斷片からでも、比論的推論に依つて、それが屬してゐる文化全態の闡明を、可能ならしむ可きものである。彼は、また、比較研究による時代の區分を試みて、象徴主義時代、類型主義時代、折衷主義時代、個性主義時代、主觀主義時代の五期を別つ。最近、ヴント Wilhelm Wundt (一八三二—一九二〇)もまた、歴史哲學を企畫して、新しい時代の區分を試みてゐる。

なほ最近には、ナトルプ Paul Natorp (一八五四生)は、歴史哲學の視點に立つて、先づ東洋、猶太、希臘、羅馬、中世、近世の精神を論じ、次に、獨逸民族の本質、その信

仰、思想、藝術、法律等を論じ、斯くして——世界史上に於ける、獨逸民族の意義と使命とを語る。オスワルト・シュペングレル Oswald Spengler は、西歐の没落を象徴的に論じて、ゲエテの有機的自然の概念に導かれつゝ、世界歴史の形態學を建設せんと試みる。オットー・ブラウン Otto Braun (一八八五生)は、過去と現代とを論じて、現代の意味を釋明せんとする。ドリーシュ Hans Driesch (一八六七生)等は、浪漫主義が抱有する、所謂「イデー」の概念に、再び生命を與へて、超個人的立脚點を確保せんと欲む。

斯くして、吾々は、新たな綜合の時代に息づいてゐる。長い間の論理的努力は、吾々を鍊へた。今や、歴史哲學の新時代は夜明けんとする。

第七項 獨逸以外の形而上學的思潮

獨逸に於けるよりも、遙かに早く、形而上學への轉向は、佛蘭西に於いて現れた。而かも、此の傾向は此處では、新カント學派そのもの、裡に確保されたのであつ

た。獨逸の新カント學派が、より多く、形而上學の否定者カントの精神に導かれて、殆んど例外なく、總ての形而上學的理念を拒斥して、論理の徹底を求めたときに、佛蘭西の形而上學は、カント哲學に多分に抱懷せらるゝ形而上學的理念を保持する事に由つて促進された。けれども、もとより、カントの理論哲學の、コペルニクスの事業から再び、素朴的獨斷の世界に逆行する事は出来ない。とは言へカントは、理論が棄てた形而上學的の珠寶をば、意志要請の救出に委せんとする。されば、現代佛蘭西の形而上學は、一言にして言へば、實に、意志の形而上學である。既に、十九世紀に於ける、佛蘭西哲學の重鎮シャルルルヌ・ヴィエ Charles Renouvier(一八一八—一九〇三)は、物自體、實體等の理念を捨てたにも拘らず、特に、自由と不滅とを確保する。而かも、カントが、唯だ、睿知の世界にのみ許した所の自由は、ルヌ・ヴィエにあつては、倫理性の條件として、再び、現象界に確固たる位置を確保する。此の自由の承諾は、必ずしも、彼れの學派にのみ限られず、恐らくは現

代佛蘭西形而上學の一般に通ずる所であらう。ジュール・ラシヤリ H Jules La-cherie(一八三二—一九一八)も、理想主義的の形而上學への傾向を示す。茲より出でて、自由の形而上學を大成したる者は、エミール・ブートルウ Emile Boutroux(一八四五—一九一八)である。彼は、先づ、偶然性の概念に、鋭利なる洞察を與へる。偶然性は、決して、人間の意志行爲の上のみ限られたものではなくて、自然そのものゝ裡に廣汎なる事實である。偶然とは、他者になり得ると言ふ事である。斯くて、彼は、機械的合法性の上に立つ自然科学的理論が、世界内容の理解に不十分なるを示し、精神的の根本本質を、自由に於いて發見する。

ブートルウより出でたるアンリ・ベルグソン Henri Bergson(一八五九生)は、現代佛蘭西形而上學の最高頂に立つて、比肩し難き廣汎なる影響を、全世界に展べる。ベルグソンの直觀流動の哲學は、經驗批判主義、唯心論、並びに新生活主義等の眞精神の徹底から、更に独自の展開を遂げたものと見る事が出来る、認識理論に關

する項参照)。彼れの教ふる所は、實在に參し得べき、直觀の肯定と、世界の精神的根基としての、生命發動力、即ち、^{エランツイキル}生の躍動の主張である。神的世界根帯。此の生命跳躍の力は、其れ自らの自由創造的にして、豫見す可からざる行爲に於いて、世界の殊に有機的展開を進展せしめる。彼にとつては、神と雖も、決して完結せるものには非ずして、繼續的成生の相に於いて理解せらる可きものである。神は自らを造るのである。斯くて、此處では、創造的進化の思想は、神そのものの上に迄も擴張される。此の、生命發動力への復歸、從つて、世界の內的衝迫への動進、それは、特殊なる直觀の作用に於いて可能である。斯くて、空間に擴充し、就中、量的なる物質に對立して、生命躍動そのものに執する本來の心的生命は、純粹なる質、若しくは純粹なる力である。即ち、純粹持續でなければならぬ。茲で、ベルグソンは、心身の關係に關して舊い並行論を捨てて、全く新なる規定を與へる。心が身體に依屬するどころか、寧しろ、純粹記憶は腦髓から全く獨立である。腦

髓は、表象を貯藏する機關ではなくて、自由創造的なる能作的機能の傳達に應ずるのみである。精神は、腦髓を行爲のための道具として、創造的に、物質の機械的構造に働きかける。斯くして、有機體は、無數の記憶の中から、生物學的に合目的なるものを選択する。即ち、ベルグソンの見方は、生物學的見地から出發する。けれども、彼れの此の思想は、生物學的にも、將た、精神病理學的にも、必ずしも、確固たる學的基础に立つものではなくて、其處には、謂はゞ神秘的なる色彩の漂ふにも拘らず、心の純粹なる内面性、より高き自我のために、自由創造の餘地を確保して、人格の哲學を説く所に、仰ぎ視る可き思想の崇高さがあるのである。

實證主義の避難所、アングロサクソンの思想界にも、——其處では、認識理論に於いては、經驗的實證主義的の傾向が、主潮を爲すものであるが——また形而上學は、新たなる生命と力とに目覺めて來た。

獨逸の形而上學的確信は、多くの場合に於いて、問題の深甚なる解答を與へんがための、必然的假定として現れてゐるのに、米國のウィリアム・ジェームス *William James* (一八四二—一九一〇) は、形而上學の基礎を、經驗的に確證せんとする。例へば、オイケンにあつては、其の本質に於いては、尙ほ、必然要求的の假定であり、そして、現實の背後に、より高き精神生命がある、と言ふ前提のもとに於いてのみ、承認せらるゝ所のものを、ジェームスは、經驗に於いて把握し得ると信ずる。即ち、彼は、宗教的經驗の本質を、超驗的實在の意識にあると考へる。高められたる宗教心には、特有なる經驗がある。それは、超世界的なる精神的勢力、端的に神そのものゝ經驗である。そして、此の際、單なる想像ではなくて、超驗的の實在性を取り扱はれてゐるのであると謂ふ事を、ジェームスは疑はない。彼れの此見解は、それ故に、通常の意味での形而上學と言ふよりも、寧ろ、彼れの認識論上の極端なる經驗主義の徹底である。(彼に關する認識論の項参照)。此の宗教心理

學上の確信と呼應して、彼はまた、變態心理的現象の意義を認め、其の基礎に立つて、通常の意識を超越せる、より高い意識を承認し、斯くて經驗的基礎に立つ形而上學の建設に武歩を進める。此の極端なる經驗主義の徹底は、當然、一元論とは全く反對に、多元論に導く可きものでなければならぬ。そこには、神と並んで神から獨立なる世界勢力の實存が、肯定されなければならぬ。實際にまた、世界の不完全なる所以が、此處に歸せられる。而して、神は、神なるが故に、この神ならぬものと戦つて、結局凱歌を奏す可きである。人は、神の戦友として、此の戦に参加しなければならぬ。けれど、夫れは、嘗て厭世的なるエドゥアルト・フォン・ハルトマン *Eduard von Hartmann* (一八四二—一九〇六) が欲した様に、存在の罪惡の故に、世界を再び無に歸せんがためではなくて、反對に、宇宙を全く神性化せんがためである。

英國に於ける、形而上學的思潮の増大は、寧ろ怪しむに足らない。由來、現代

英國の哲學は、恒に必ずしも、經驗論のみの支配に委ねられてはゐなかつた。殊に、オックスフォードを中心とする講壇の哲學には、グリーン Thomas Hill Green (一八三六—一八八二)、ケヤード Edward Caird (一八三五—一九〇八)以下、新ヘーゲル學徒の一團が、思潮の舵を取る。就中、フランシス・ハーバート・ブラッドレー Francis Herbert Bradley (一八四六生)の觀念論は、現代英國哲學の重鎮でなければならぬ。其の他、此の一團に屬する(または近き)人々には、ジョン・ケヤード John Caird (一八二〇—一八九八)、エドワードの兄弟、ウィリアム・ワレーズ William Wallace (一八四三—一八九七)、ハルデーン卿 Lord Richard Burton Haldane (一八五六生)、バーナード・ボサンケット Bernard Bosanquet (一八四八—一九二二)、マクタガルト John M. E. MacTaggart (一八六六生)、マッケンジー J. S. Mackenzie (一八六〇生)、ジョアキム H. H. Joachim、ペーリー J. F. Baillie、更にアンドリュ・セス Andrew Seth (一八五六生)現在には、プリングル・パッチソン A. S. Pringle-Pattison と改名等を

數へ得るであらう。

これらの主知論的傾向に對する、シラー F. C. S. Schiller (一八六四生)一派の實用主義的反動も、また同時に、形而上學の建設に向ふものである。——デョーヂ・エドワード・モア George Edward Moor、並びに、バートランド・ラッセル Bertrand Russell (一八七二生)等は、新實在論を代表する。——スタウト George Fredrick Stur (一八五九生)、ラッシュ・ダール Hastings Rashdall (一八五八生)等は、シラーに類似して、觀念論と實用主義との析衷派である。——更に、ジェームス・マルチノー James Martincau (一八〇五—一九〇〇)を中心として起つた有神論學派には、フレシャー Alexander Campbell Fraser (一八一九—一九一四)、フリント Robert Flint (一八三八—一九一〇)、リンゼイ James Lindsay (更に、マックス・ミラー Max Müller (一八二三—一九〇〇)等を數へ得るであらう。——これらの人々は、すべて、何らかの意味に於いて、形而上學を要求する人々である。

嘗て、コムトやスペンサーの影響のもとに、——ロベルト・アルディ、Robert (Lombardo) Ardigò (一八二八—一九〇九)を初めとして、——永いあひだ、實證主義に支配されてゐた伊太利の哲學も、今やその實證主義的の根柢を抜き去らんとしてゐる。此の動搖と建設の先頭に、特に二人の哲學者を見る。其の一人は、ベネデット・クローチエ Benedetto Croce (一八六六生)。彼は、現代伊太利哲學の重鎮として、ヘーゲル哲學の改新と展開とを以つて、伊太利の新哲學を建設しようとする。他の一人は、ベルナルディ・ノヴァリスコ Bernardino Va.isco (一八五〇生)。彼は、現代の伊太利に、特に注目す可き道程を歩む哲學者であらう。即ち彼は實證主義的思想から出でて、今や漸く、ライブニッツに溯源せんとする獨逸現代の思潮に、密に近接す可き傾向を示してゐる。彼はまた、有神論的の唯心論に傾いてゐる。その他、デオヴァンニ・ヂエンティ、Giovanni Gentile (一八七五生)も、ク

ローチエと共に、ヘーゲルを祖述して、新理想主義に赴く。フェデリコ・エンリケス Federico Enriques (一八七一—生)は、詩的生活の擴張としての宗教に、「自由」を承認する。尙ほ、獨逸の實證主義の如くに、伊太利の夫れも、一般に、形而上學へと赴くものである。

和蘭のポーランド G. J. P. J. Bolland (一八五四生)も、ハルトマンより出でてヘーゲル哲學に入り、其處に、オランダ新ヘーゲル學派を開拓した。ビーレンス・デ・ハーン J. D. Bierens de Haan 等が、これに屬してゐる。丁抹に於いて、ヘフディング Harald Höffling (一八四三生)は、カントとシ・ウベンハウエルと英國の實證主義との影響より出でたる、僅れたる哲學者である。尙ほ、其處には、クローマン Kristian Kroman (一八四六生)がある。

ポルシェヴィキ以前の露西亞に於いてもまた、實證主義の時代は、過ぎ去つてゐた。そして、其處には、新プラトーン的神秘主義の時代が夜明けつゝあつた。

最近の最も主要なる思想家の一人、ウラヂミル・ソロウイヨフ Vladimir Ssolovjev (一八五三—一九〇〇)は、全く、新プラトーン的神秘主義に立つて哲學を啓示及び教會の信仰に融合せんと努力した。ヘーゲル學徒チチェリン P. Tschitscherin (一八二八—一九〇四)もまた、形而上學の基礎を求めてゐた。

第六章 新トーマス主義

— Neothomismus

最後に、現代の哲學壇上に、特殊の位置を占むる、教會の哲學、新トーマス主義に就いて一言しておかう。由來、教會の哲學の完成たる、トーマス・アキナスの哲學は、加特力の模範哲學として、中世以來六百餘年の傳承を保つてゐた。殊に、一八七九年八月四日、トーマス哲學の採用と普及に關する、レオ十三世の布告以來、此の哲學は、加特力教會の正統哲學たるの承認を得て、伊太利佛蘭西、獨逸、白耳義、和蘭等に於いては、此の主義の確立と普及のために、特別なる機關の成立を見るに至つて、今や全く、超國境的精神運動となつてゐる。加特力教會の存する所、到る所に、此の新トーマス主義は教へられる。

現代の新トーマス主義の哲學は、大體に於いて、認識理論に於いては、實在論的

であり、形而上學に於いては、有神論的傾向を有する。と同時にまた、新生活主義的色彩を帯び、そして、現代の現象學的思潮の論理主義に親近なる思想を表示してゐる。夫れ故に、現代の新トーマス主義は、勿論スコラ哲學の單なる踏襲に非ずして、其の哲學的立場の根柢に於いて、まさしく現代のものでなければならぬ。けれども、他面に於いては、新トーマス主義は、何よりも教會の哲學であるが故に、極言すれば、宗教の檢束の下に立たなければならぬ。其の世界觀の本質的面目は、教會の傳統權威を通じて與へられ、認識と並んで、啓示も亦眞理への道程として承認されなければならぬ。斯かる、傳統的權威の束縛。これが、純粹に科學的立場にある人々からの、經蔑を惹起する所以となる。けれども、若し單に、自然科學的確信の上のみ立脚せざるの故を以つて、一概に新トーマス主義を輕侮するならば、それは餘りに不當である。寧ろ、非常に堅固なる哲學の傳統を有し、從つて、善良なる思惟の指導と教養を賦へ得る此の學派は、斯かる傳

統を有するが故にこそ、反つて、多くの陥り易き自然科學の誤謬に對して、自らを護り得るものであると謂ひ得ないであらうか。

斯くて、今日に於いては、教會の權威によつて、超ゆ可からざる限界を呈示せられつゝある此の學派の中からも、眞に獨立的なる多くの重要な思惟が現れてゐる。例へば、獨逸に於いては、エンゲルベルト・ローレンツ・フィッシャー Engelbert Lorenz Fischer (一八四五生)は、認識理論及び形而上學の根本問題に穿入する。アルファンス・レーメン Alfons Leinen (一八四七—一九一〇)も、注意すべき一人であらう。殊に、ヨセフ・ガイザー Josef Geysar (一八六九生)は、全く新しき見地に於いて、アリストテレスの認識論を討究し、また、新スコラ主義と、現代の論理學並びに心理學との結合を企てゝゐる。

更に、中世哲學の歴史的研究に於いて、獨逸新トーマス學派の功績は、特に忘る可からざるものがある。例へば、ゲオルグ・フォン・ヘルトリング Georg von Hert-

Ing (一八四三—一九一九)クレメンス・ポイムカー (Clemens Bäumker (一八五三生)、マルチングラーブマン Martin Grabmann (一八七五生)等。今や、これらの人々によつて、中世哲學史は、其の組織的統一に於いても、また其の細論的研究に於いても、漸やく大成されやうとしてゐる。

第七章 結 詞

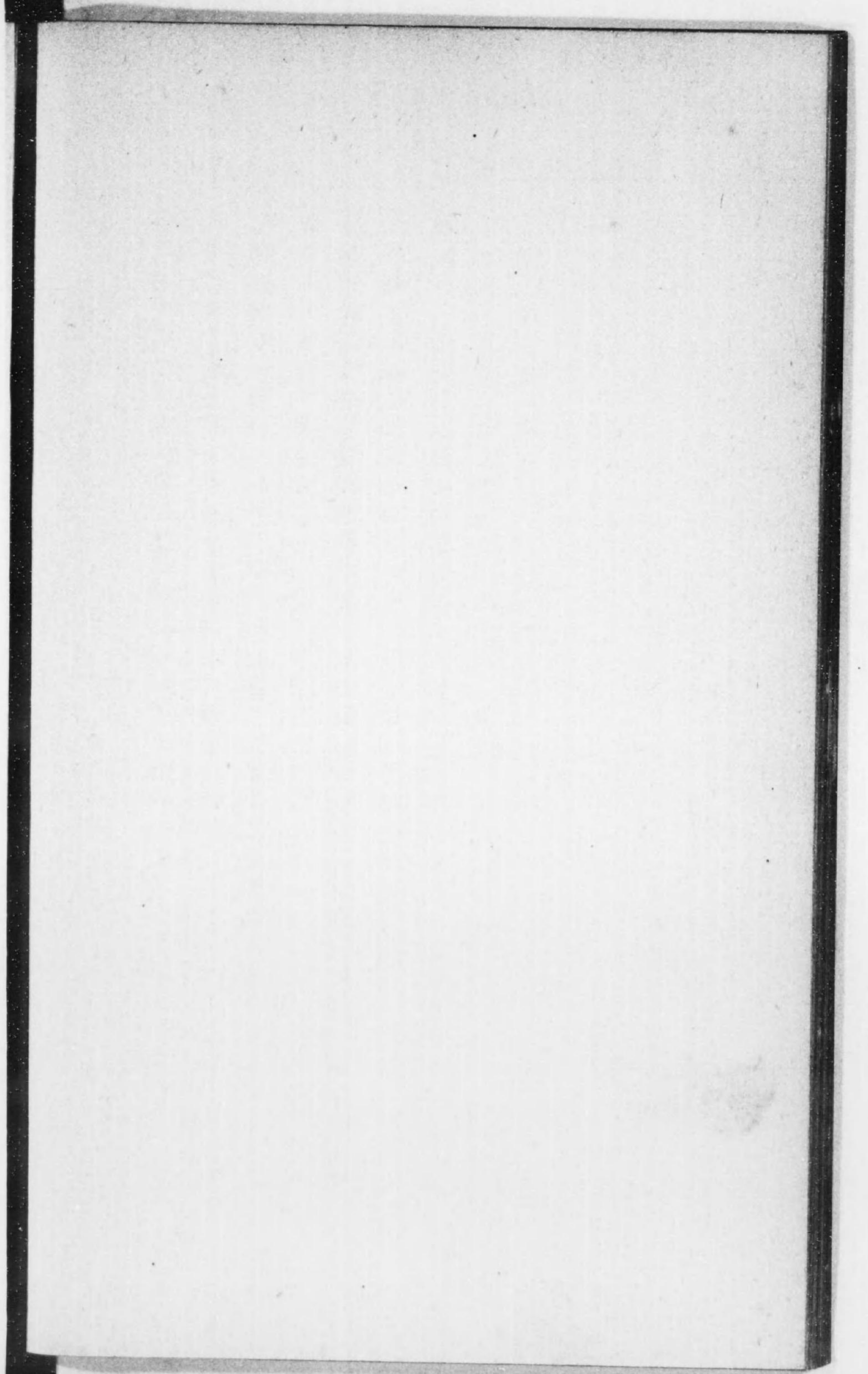
以上、極めて不完全、寧しろ皮相的にはあるが、現代哲學の主潮を、大體に於いて盡したと思ふ。そして、各思潮の、現代の哲學界に於ける位置に就いて語つた。廣き意味での哲學の諸分野、心理學、論理學、社會哲學、法律哲學、美學、宗教哲學等に就いては、最初から、此の小篇の圏外に置いた。尙ほ此處に考察すべくして、しかも、餘りに盡さなかつたものに、數理哲學と哲學史的勞作とがある。殊に後者に關しては、現代は實に、豐饒なる努力の成果を有するにも拘らず、制限せられたる紙數と時間との爲めに、茲に割愛せざるを得ない。尙ほ、此處に擧げられたる現代哲學者の撰擇に關しても、必ずしも適切なるを保し難い事を感じる。元來此の小篇は、現代哲學のオリエンテーションの一般を示す事を以つて、全任務とし

たものであつてもとより、現代の哲學を説き盡さんとするが如き暴舉に出でたものではなかつたのである。

現代の哲學が吾々に與へる全體の印象は、不斷の努力の向上である。若し、哲學は徃徊逡巡すとの非難を與へるならば、夫れは、哲學的思惟の本質、ディアレクティックの眞精神を、理解せざるものと謂はなければならぬ。哲學の展開は、分合進化の路上に於ける、ヘラクリットの精進である。斯くて現代は、史上最も精銳なる認識理論の刃をといふ。新たなる形而上學と、殊に歴史哲學とは、新たなる世界觀の基礎を置いて、生命の本質を闡明せんとする。新たなる浪漫的理想主義の、大組織時代の黎明は、告げられようとしてゐる。

嘗て、カントのコペルニクスの事業は眞に内面的自我の自覺を呼び醒して、十九世紀初頭の浪漫主義の大組織を生むだ。併し乍ら、古い浪漫主義は、未だ十分

に客觀の根柢に達せず、學的嚴密さの要求に於いて、未だしきものがあつた。現代の哲學は、新たなる生命の發見の上に、嚴密なる學たらんとするの深奥なる内面的要求に目覺めてゐる。現代の浪漫主義は、自然科學の煉獄の底に徹して、其處から再び生れたる理想主義である。若き永遠のフェニックスである。新たなる組織は、眞の人間の睿智の上に立つ確信でなければならぬ。新たなる理想主義は、單なる主觀的抒情詩人に非ずして、客觀的なる戯曲詩人でなければならぬ。見よ！潑瀾たる黎明の大自然に、新たなる生命の脈搏を感じつつ、吾親愛なるファウストは、第二部の路程に上りつゝある。(一九二二・七・二一—二八稿)。



人 名 索 引

例へば (1870, x, 29—Göttingen) の如きは 1870年×月
 29日生れにして, 1922—23 の Winter Semester に, 彼が
 Göttingen の大學に居たことを示す。

人名索引

A.

Aoh, Narziss (1870, x, 29—Göttingen)..... 16, 138,
 Adickes, Erich (1866, VI, 29 -Tübingen)..... 149,
 Ameseder, Rudolf 91,
 Ardigò, Roberto (1828—1909) 168,
 Aristoteles (384—322 V. Chr.) 89, 135, 173,
 Avenarius, Richard (1843—1896) 54, 58,

B.

Baillie, J. B.166,
 Bauch, Bruno (1877, I, 1—Jena) 40,
 Bäumker, Clemens (1853, IX, 16—München)174,
 Becher, Erich (1882, IX, 1—München).....49, 136, 137, 150,
 Benussi, Vittorio.....91,
 Bergson, Henri (1859—).....
5, 15, 16, 112, 114, 115, 148, 161, 162, 163,
 Herr, H. 74,
 Bierens de Haan, J. D. 169,
 Binet, Alfred (1857—1911) 84,
 Bolland, G. J. P. J. (1854—) 169,
 Bolzano, Bernard (1781—1848)..... 90,
 Bosanquet, Bernard (1848—1923) 166,
 Bottazzi 85,
 Boutroux, Émile (1845—1918) 51, 112, 161,
 Bradley, Francis Herbert (1846—) 15, 16, 128, 166,
 Braun, Otto (1885—) 159,
 Brentano, Franz (1838—1917)..... 81, 82, 89, 90, 92, 96, 145, 152,
 Bruno, Giordano (1548—1600)..... 126,
 Brunswick 107,

人名索引

Buchenau, A.30,
 Buek, O.30,
 Burckardt, Jacob (1818—1897)16, 157,
 Burger, Fritz 100,

C.

Caird, Edward (1835—1908) 52, 127, 166,
 Caird, John (1820—1898) 166,
 Cantoni, Carlo (1840—1906).....14, 52,
 Cantor, G. (1845—1918)..... 106,
 Carus, Paul (1852—1919) 128,
 Cassirer, Ernst (1874, VII, 28—Hamburg) ... 29, 34, 35, 36, 107,
 Cohen, Hermann (1842—1919)
 6, 12, 14, 16, 29, 30, 31, 33, 34, 35, 38, 52, 118, 148,
 Cohn, Jonas (1869, XII, 2—Freiburg)40, 153,
 Comte, Auguste (1798—1857).....168,
 Conrad=Martius, Hedwig 91,
 Cornelius, Hans (1863, IX, 27—Frankfurt)...57,
 Couturat, Louis (1868—1914) 15, 106,
 Crawford 85,
 Croce, Benedetto (1866—)16, 168, 169,

D.

Darwin, Charles (1809—1882) 133,
 Dedekind.....107,
 Descartes, René (1596—1650) 25,
 Dewey, John (1859—) 61,
 Dilthey, Wilhelm (1833—1911).....
 14, 15, 67, 70, 82, 110, 111, 112, 120, 121, 157,
 Driesch, Hans (1867, X, 28—Leipzig)...15, 6; 104, 134, 5, 6; 146, 159,

人名索引

Duhem, Pierre (1861—1916) 51,
 Dürr, Ernst (1878—1913).....50,

E.

Ehrenfels, Christian Freiherr von (1859—).....145, 146,
 Einstein, Albert (1879, III, 14—Berlin)107,
 Enriques, Federico (1871—)58, 169,
 Erdmann, Benno (1851—1921)... 84, 107,
 Eucken, Rudolf (1846—)...6, 16, 44, 130, 139, 140, 141, 142, 164,

F.

Falckenberg, Richard (1851—1920) 序 6,
 Falter, G.30,
 Fechner, Gustav Theodor (1801—1887) 76,
 Fichte, Immanuel Hermann (1797—1879) 144,
 Fichte, J. G. (1762—1814)..... 42, 72, 128, 139,
 Fischer, Engelbert Lorenz (1845—) 173,
 Flint, Robert (1838—1910) 167,
 Flournoy, Théodore 85,
 Fouillée, Alfred (1838—1912)..... 15, 126,
 Francé, Raoul H. (1874—)137,
 Frankl, Wilhelm 91,
 Fraser, Alexander Campbell (1819—1914).....167,
 Frege, Gottlob (1848—) 107,
 Freud, Sigmund (1856—) 85,
 Fries, Jakob Friedrich (1773—1843)..... 28,
 Frischeisen=Köhler, Max (1878, VII, 19—Halle)..... 50, 70, 157,

G.

Galilei, Galileo (1564—1641) 25,